

松 本 古 墳 群
大 角 山 古 墳 群
すべりざこ古墳群

一般国道9号松江道路（西地区）建設
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3

1997年3月

松江国道工事事務所
県教育委員会

松 本 古 墳 群
大 角 山 古 墳 群
すべりざこ古墳群

一般国道9号松江道路（西地区）建設
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3

1997年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路建設に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によつて必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに昭和50年度から発掘調査を行っています。

本報告書は平成7年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。

本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深堪なる謝意を表するものであります。

平成9年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局から委託を受けて一般国道9号松江道路建設予定地内の発掘調査を行っております。平成5年度からは松江市乃木福富町から八束郡玉湯町にかけての調査を実施しています。この地域は宍道湖を北に望む眺望絶佳の地であり、西には、めのうの産地である花仙山も位置しています。古くから交通の要衝として栄え、古代には山陰道も通っていたと『出雲国風土記』に記載されています。

この報告書では、平成7年度に実施した、松江市と玉湯町の境の松本古墳群、すべりざこ古墳群、大角山古墳群の調査成果をまとめています。このうち松本古墳群では、古墳時代後期の横穴墓や古代にまでさかのぼる可能性のある道路跡などが見つかりました。

本書が、宍道湖南岸地域の人びとの暮らしやそれを取り巻く自然の営みに触れる契機となり、私たちの身のまわりに残されている文化財への理解の手掛かりとして多少なりとも役立てば幸いと思います。

終わりに、発掘調査及び本書の刊行にあたって、御協力いただきました建設省中国地方建設局をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が、建設省中国地方建設局から委託を受けて平成7（1995）年度に実施した一般国道9号松江道路西地区の埋蔵文化財充掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡と地番は次の通りである。

松本古墳群 松江市乃木福富町731-1番地外
大角山古墳群 八束郡玉湯町布志名767-10番地外
すべりざこ古墳群 松江市乃白町802-3番地外
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体	島根県教育委員会	
事務局	文化財課　勝部昭（課長）、森山洋光（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、 渋谷昌宏（同主事）	
調査員	足立克己（調査第4係長）、柳浦俊一（同文化財保護主事）、日高淳（同教諭兼文化財保護主事）、山岡清志（同教諭兼文化財保護主事）、間野大丞（同主事）、 横山純子（同臨時職員）、伊藤智（同）、梅木政志（同）、和田郁子（同） 調査指導	池田満雄（島根県文化財保護審議委員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、 木下良（古代交通史研究会会长）、中村太一（国学院大学助教授）
4. 松本古墳群I区の花粉分析については川崎地質微化石分析所に委託し、その結果を収録した。
5. 松本古墳群3号横穴墓出土の金属製品の保存処理については、藤元興寺文化財研究所に委託し、これを行った。
6. 充掘作業（充掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、社団法人中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部　布村幹夫（現場事務所長）、
　　勝部達也（技術員）、岩崎あき子（事務員）
7. 採図中の方位は、国上調査法による第III座標系の軸方位を示す。
8. 本書に掲載した「遺跡地図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。また「調査区配置図」は松江懐都市計画図を使用した。
9. 本書に掲載した遺物の整理、実測、図版の作成には調査員のほか以下の者が行った。

遺物整理：荒川裕美、川上登志江、藤原須美子、二上恭子、安井淳子、若佐裕子
報告書作成：板垣見知子、佐々木京子、佐々木孝子、津森真弓、錦織美千恵、山根るみ子、
　　米田克彦（四国学院大学学生）、伊藤善太郎（調査補助員）
10. 本書に掲載した遺物の写真撮影は柳浦、開野が行った。
11. 本書の執筆編集は文化財課職員の協力を受けて主に間野が行い、松本3号横穴墓については伊藤、梅木が行った。
12. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

目 次

I 調査に至る経緯と経過	1	第24図 土坑実測図(1)	31
II 遺跡の位置と環境	2	第25図 " (2)	32
III 松本古墳群	7	第26図 III区出土石器実測図	32
自然科学分析	39	第27図 III区出土上器実測図	33
IV 大角山古墳群	43	第28図 IV区全体図	34
V すべりざこ古墳群	46	第29図 横穴状遺構断面図	35
挿図目次		第30図 " 上層堆積図	35
第1図 岩屋口古墳実質図	3	第31図 堤跡出土須恵器実測図	35
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	4	第32図 堤跡上層堆積図	36
第3図 調査区配置図	5~6	第33図 V区遺構配置図	37
第4図 I区道路遺構実測図	8	第34図 SX01実測図	37
第5図 道路遺構上層堆積図	9~10	第35図 SX02実測図	37
第6図 道路遺構造物出土状況	11	第36図 SX03実測図	37
第7図 I区出土須恵器実測図	12	大角山古墳群	
第8図 I区山上石器実測図	12	第37図 調査前地形測量図	43
第9図 I区北西斜面出土石斧実測図	13	第38図 6号墳填丘断面図	44
第10図 横穴状遺構実測図	14	第39図 調査区内土層堆積図	44
第11図 II~IV区全体図	15	第40図 6号墳土層堆積図	45
第12図 横穴墓実測図	16	第41図 6号墳地形測量図	45
第13図 墓道遺物出土状況実測図	17~18	すべりざこ古墳群	
第14図 墓道内出土十器実測図(1)	19	第42図 I区全体図	46
第15図 " (2)	20	第43図 土層堆積図	46
第16図 玄室内遺物及び閉塞石出土状況実測図	23~24	第44図 粘土貯蔵穴実測図	47
第17図 玄室内山上上器実測図(1)	25	第45図 磐石建物跡実測図	48
第18図 " (2)	26	第46図 遺構実測図(1)	49
第19図 玄室内出土鉄器実測図(1)	27	第47図 遺構実測図(2)	50
第20図 " (2)	28		
第21図 III区上層堆積図	29		
第22図 道路状遺構実測図	30		
第23図 加工段実測図	30		

I 調査に至る経緯と経過

一般国道9号松江道路は、松江市街地の交通渋滞の解消を目的に昭和47年（1972）に都市計画決定され、八束郡東山雲町から同玉湯町に至る10.7kmにおいて建設工事が進められている。埋蔵文化財調査は、平成3年度までに八束郡東山雲町から松江市東津田間の調査が完了し、東山雲町から松江市乃木福富町に至る9.1km区間については平成3年（1991）に供用が開始されている。

残りの松江市乃木福富町から八束郡玉湯町布志名に至る1.6km区間（便宜上「松江道路西地区」と呼ぶ）については、平成2年（1991）に建設省松江国道建設事務所から予定地内の遺跡について照会があった。

これを受けて鳥取県教育委員会は同年、建設予定ルートの分布調査を実施し、9つの遺跡が存在することを確認した。

本書に収録した松本古墳群、大角山古墳群、すべりざこ古墳群は、いずれも平成7年度に調査を実施したものである。

●松本古墳群 4月17日から28日までトレンチ調査を実施し、本調査を6月20日から平成8年の2月2日まで行った。I区は、調査前から古代山陰道正西道の推定地とされており、調査前まで道として機能していた。重機で表土掘削後、6月20日より調査を開始した。谷地形のため、流水等により明瞭に硬化面等を確認できなかった。このため道路を横断するようにトレンチを設定し、上層観察を行った。その結果、道路の法面に相当するものと思われる掘り形を確認した。しかし、時期を決定し得る出土品もなく道路造構の構造も不明な点が多くたため、8月18日、9月20日の2回にわたり調査指導会を開催した。調査指導会では古代道の可能性が高いとの指導とともに、今後の調査方法について指導があった。9月23日には現地説明会を開催し、あいにくの雨模様にもかかわらず、約70名の参加者があった。参加者のなかには、手に『出雲国風土記』や国土地理院発行の地図を携えた人も見られ関心の高さが伺えた。その後、道路造構の断ち割りなどの補足調査を行い10月12日に総ての調査を終えた。また、道路造構の造成による周辺の植生の変化を調べる目的で、川崎地質微化石分析所に委託して花粉分析を行った。III区の調査は9月24日からI区の調査と平行して進めた。調査区内の緩斜面に尾根筋から流れ込んだと思われる繩文後期から古墳時代までの遺物包含層と時期不明の上坑、加工段を確認した。また調査区内的谷筋も古代山陰道の可能性を指摘されていたが、道路造構と判断するに至らなかった。IV区では、東に存在する地形池に伴う堤跡や、性格不明の横穴状造構を検出した。V区では、丘陵頂部からやや下がった辺りで、焼土や木炭をともなう七坑等を確認した。排土処理の関係でI区の調査終了を待って、トレンチ調査で確認した3号横穴墓の調査と周辺の表土掘削を行った。周辺からは新たに横穴墓は確認されなかった。3号横穴墓の調査は11月24日より開始した。墓道の調査を12月11日に終えた後、一旦調査を止め、年の明けた1月8日より調査を再開した。玄門部は自然石を積み上げて入念な閉塞がなされており、記録作成には時間を要した。12日に総ての閉塞石が取り外され、玄室に到達した。玄室は既に天井が崩落していたが、遺物等は良好に遺存していた。玄室内の遺物取り上げを19日に終了した後、断続的に実測を行い、総ての記録作成を雪の吹き荒ぶ2月

2日に終了した。

●大角山古墳群 平成7年4月17日から5月26日まで調査を実施した。この古墳群は、松江市乃木福富町から八束郡玉湯町布志名にまたがる丘陵上に位置しており、全長61.4mの前方後円墳である1号墳とその他7基の古墳から構成される。このうち、調査の対象となったのは6号墳の一部と、7号墳であった。7号墳は調査の結果、主体部等も確認できず、古墳ではないものと判断した。

●すべりざこ古墳群 年度当初、予定内の民家が移転未了であったため、その部分を残して5月8日よりトレンチ調査を行った。横穴墓の存在が予想されたため斜面に密にトレンチを設定し調査を進めた。その結果、II区で横穴状の遺構1基を確認した。横穴墓は人ひとりが通れるほどの幅の狭いもので、奥には粘土が置かれていた。この粘土を採取し、玉湯町布志名で雲善窯を操業している土屋善四郎氏に鑑定して頂いた。その結果、布志名焼の生地として使用できるものとわかったため、粘土保管用の横穴と判断した。7月14日に記録作成を終え一旦調査を終了した。家屋移転が終わった11月より、第2次調査を再開した。トレンチ調査の結果を踏まえて、II～IV区について重機による表土掘削後、本調査を行った。II区では土坑や性格不明の遺構を、III区では近代以降と考えられる礎石建物跡1棟、IV区では十坑1基を確認した。雪の積もる12月26日に総ての記録作成を終えた。

II 遺跡の位置と環境

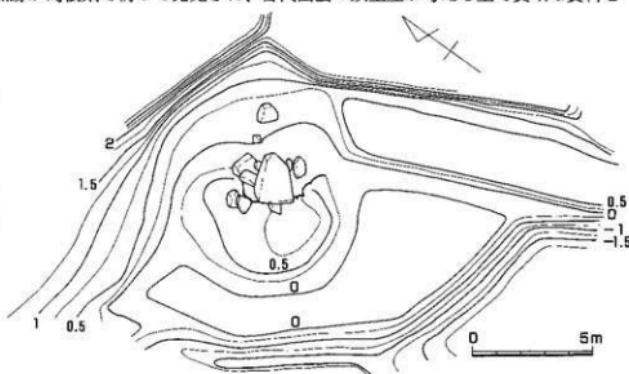
松本古墳群、大角山古墳群、すべりざこ古墳群は松江市から玉湯町の境に所在する。遺跡は、いずれも玉湯町に跨る花仙山（めのうの産地として有名）から派生し宍道湖に向かって延びる低丘陵上から斜面に位置している。

旧石器・縄文時代 現在のところ、遺跡は知られていないが、廻田遺跡では旧石器時代の玉髓製のナイフ形石器が出土しているほか、福富Ⅰ遺跡では尖頭器が採集されていることから、今後、この時代の遺跡が発見される可能性が考えられる。

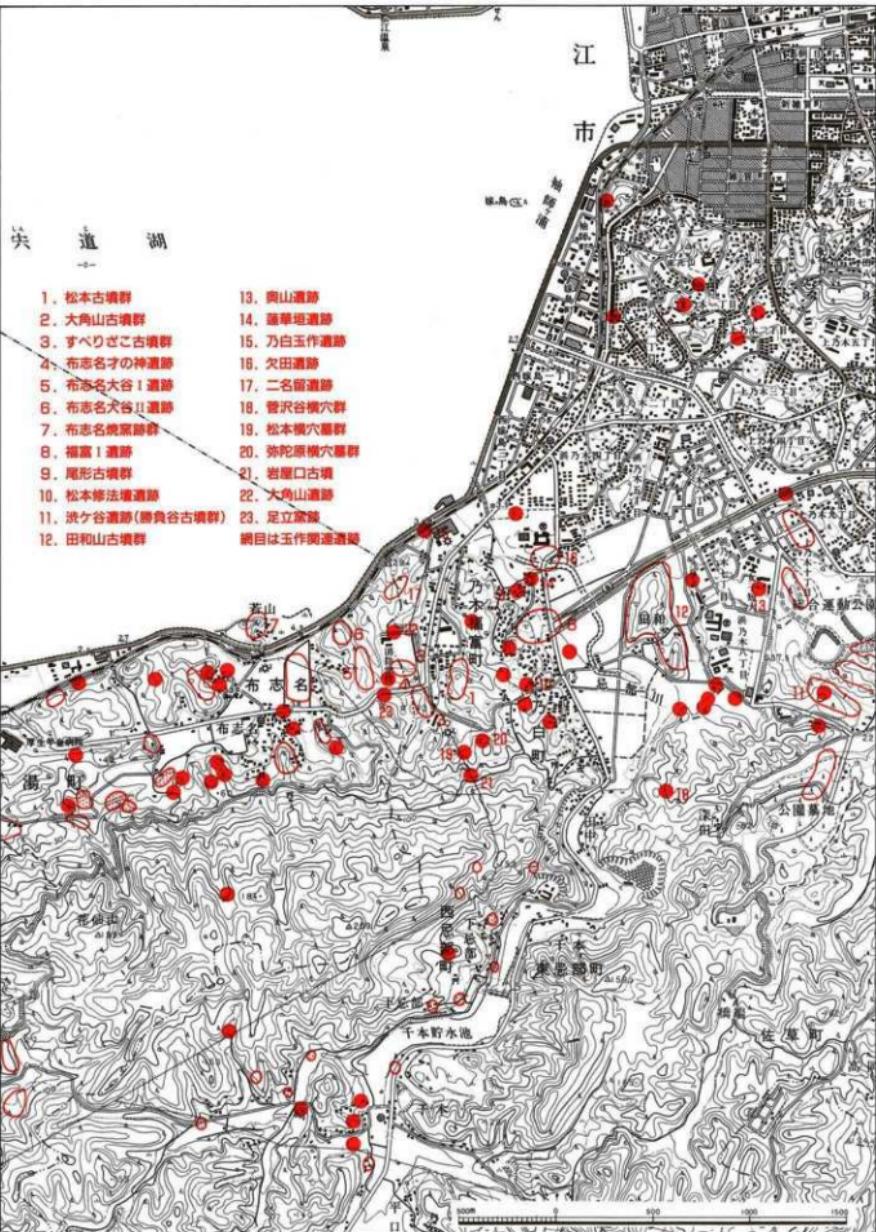
弥生時代 欠田遺跡が前期から後期にわたる遺跡として知られている。中期から後期にかけては丹白川の東側の丘陵に友田遺跡で墳丘墓が築造されている。友田遺跡では四隅突出型墳丘墓を含む墳丘墓6基と土壙墓26基が検出された。墳丘墓は弥生墳丘墓としては県内でも最古の部類に入るるものである。集落跡としては廻田遺跡で後期の竪穴住居跡が1棟検出されている。

古墳時代 前期古墳はいまのところ発見されていない。忌部川流域では中期後半の木棺直葬の小規模古墳より構成される古墳群がいくつか知られているが、突出した規模を有するのが、全長61.4mの前方後円墳である大角山1号墳である。この古墳は、出雲東部でもトップクラスの規模を有しており、かなりの力を有していた首長の墓と考えられる。しかし後期になると、横穴式石室をもつ古墳として田和山1号墳や岩屋口古墳が知られる程度で、多くは横穴墓である。発掘調査が行われた田和山1号墳は全長20mの前方後円墳で、石室の玄室からは大刀2、短刀1、鉄具1などが出土している。また压形1号墳では西日本ではめずらしい木芯粘土室を内蔵する方墳も見つかっている。横穴墓は弥陀原横穴墓群や松本横穴墓群、菅沢谷横穴墓群などが知られる。このうち弥陀原1号横穴墓、背沢谷C-5号横穴墓は組み合わせの箱形石棺を内蔵しており、注意される。生産遺跡としては上作遺跡が多く見つかっているが、調査された福富Ⅰ遺跡、大角山遺跡とも古墳時代中期という短い期間しか生産されていない点が注目される。製鉄遺跡は、不明な点が多かったが、布志名大谷Ⅱ遺跡で、製鉄用の炭窯といわれる横口付炭窯跡が鳥取県で初めて発見され、古代山雲の鉄生産が考える上で貴重な資料となつた。

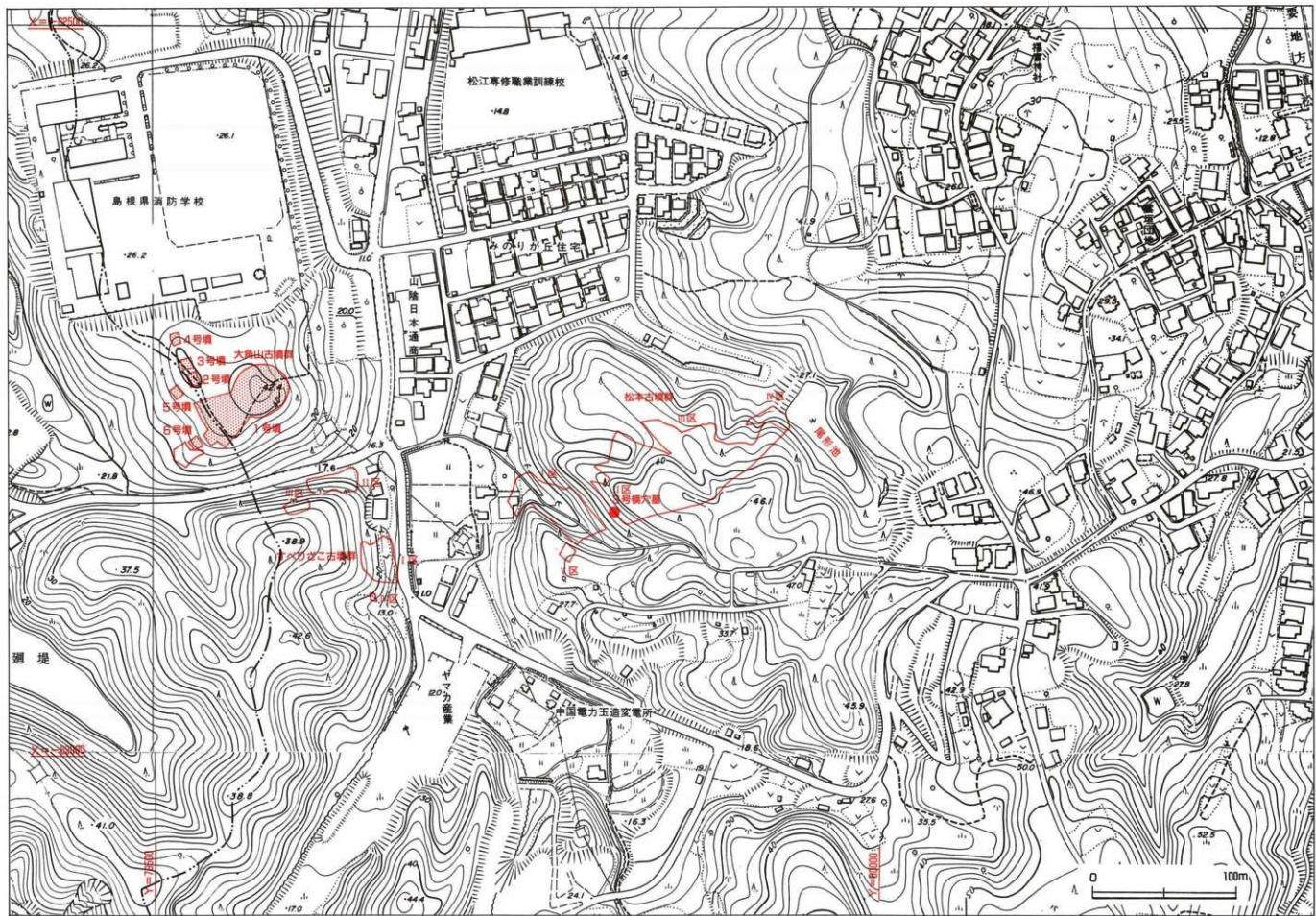
歴史時代 奈良時代の地誌である『出雲国風土記』には、この付近を「通道」が通っていたと記載されている。松本古墳群では、不確定な要素が多分にあるが古代道の一部が確認されており、古くからこの地域が交通の要路に沿って繁栄していたものと考えられる。



第1図 岩屋口古墳 (S=1:200) (内田律雄氏原図)



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 ($S = 1: 25,000$)



第3図 調査区配図図 (S = 1: 25,000)

III 松本古墳群

第1節 遺跡の概要

松本古墳群は松江市と玉湯町の境、松江市乃木福富町に所在する。遺跡は、めのうの産地として有名な花仙山から派生する標高約40mの丘陵上から丘陵緩斜面および谷部に拡がっている。丘陵上からは宍道湖とその北岸一帯を望むことができる。^(注1) 遺跡の一部は平成5年度に調査が実施されており、横穴墓2基、落とし穴1が検出されている。

トレンチ調査の結果および立地等を勘案して、調査区内をI～V区の5つに分けて調査を実施した。I区からは、丘陵の谷部を通る、所謂、切り通し状の道路遺構を検出した。道路遺構の築造時期を示す出土品は無いが、形態から見て、古代にまで遡る可能性をもつものと思われる。I区の北側の丘陵南斜面のII区からは、横穴墓1基（松本3号横穴墓）を検出した。ここは平成5年度に調査された横穴墓の所在する丘陵の南の丘陵に当たる。III区は、横穴墓の所在する丘陵上から、その北側の谷部と標高44～34mの比較的緩やかな斜面を範囲とする。丘陵上はすでに大規模な改変を受けており、丘陵頂部へと延びる道路遺構の一部が確認できたのみである。また、この丘陵の東側斜面は人規模に削平されており、谷部についても底面が平坦に造成されている。時期は不明だが、谷筋を拓げるための大規模な造成が行われたものと思われる。丘陵緩斜面からは遺構は上坑2基が検出されたのみだが、縄文後期から奈良時代までの遺物が微かに出土しており、丘陵上を中心として周辺での遺構の存在が予想される。IV区では、調査前まで存在していた「崖形池」にともなう堤跡などを検出した。堤跡は丘陵裾部を凹状に掘削した後、そこを起点として版築によって築造したものである。V区では、丘陵頂部からわずかに南に下がった斜面から炭焼に関係すると思われる十坑などを検出した。

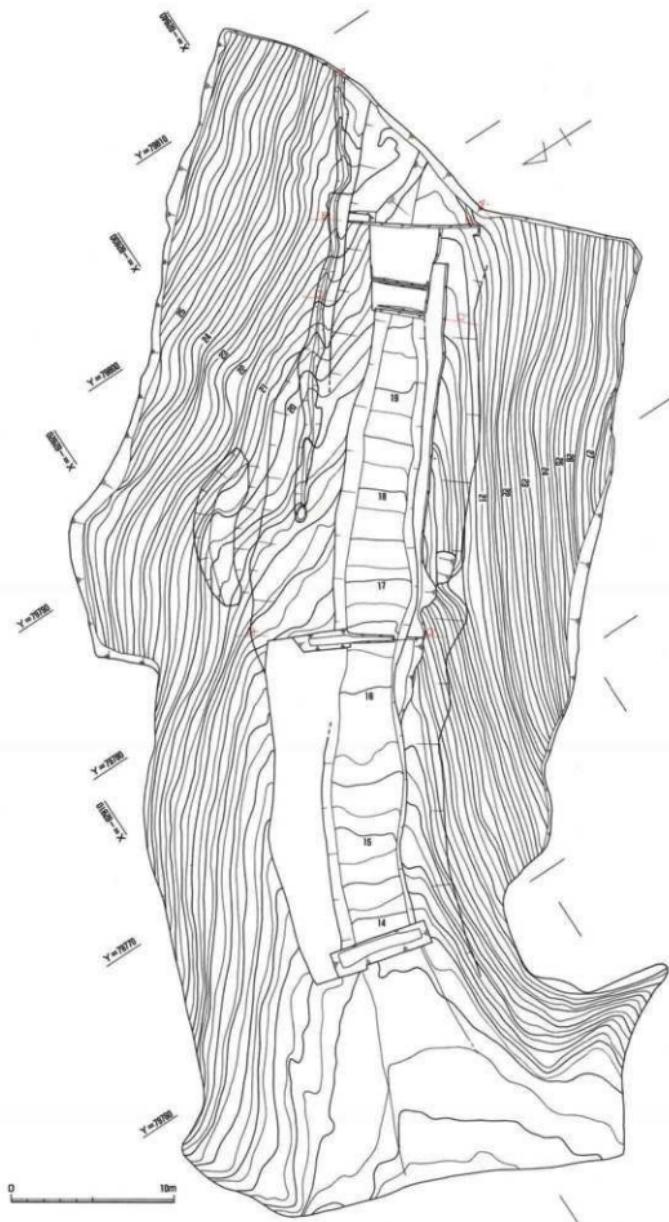
（注1）鳥取県教育委員会 建設省松江国道工事事務所『松本古墳群 一般国道9号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』 1994

第2節 I区の調査

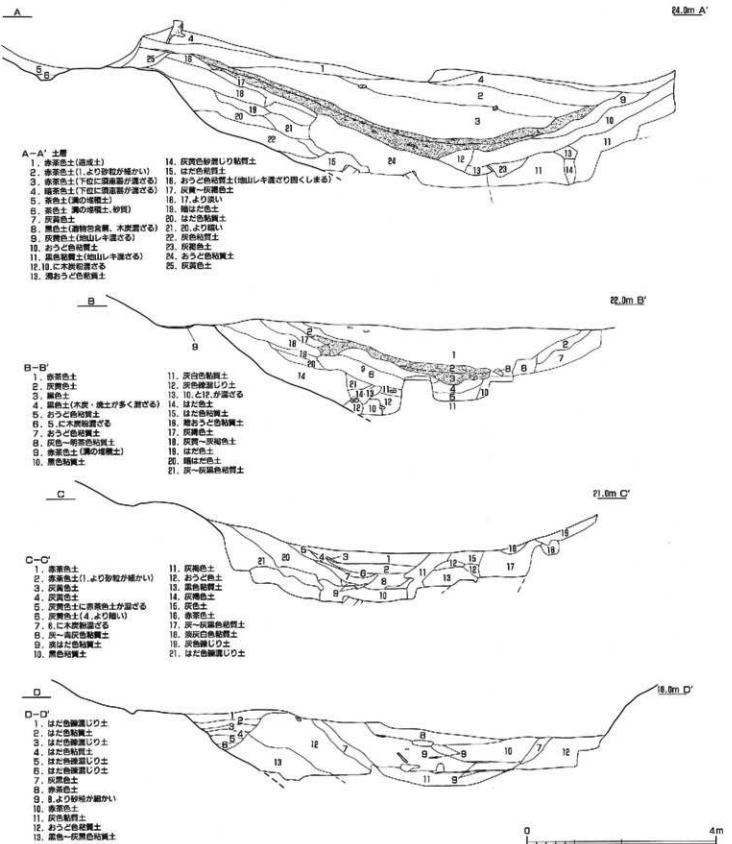
道路遺構

規模は調査部で全長約38m。谷地形に沿って弧を描きながら南東から北西に向けて延びる。掘り形の幅は2.7～4.6m。底面幅は1.4～3.2mである。谷筋の出口では比較的広く、東にいくに従い狭くなる。掘り方の形状は上開きのコ字形をなす。底面の整形は不明である。

この道路遺構の北側の地山は幅1.0m前後の平坦面に整形されている。ただ、B-C間には平坦でないところも見られるなど一様ではない。また、この平坦面についてはD-D'ラインより西側では明瞭に検出できていない。さらにその北に沿って溝状遺構が認められた。溝は調査区途中で途切れたり検出された長さは28m、溝底面の幅は0.2～0.4mを測る。また、谷全体について見ると、南北の斜面に不自然な傾斜の変換が伺える。これは、人為的に丘陵斜面を整形した痕跡と判断される。この部分での幅は13.0mとなる。これが仮に道路遺構に伴う造成とすれば底面の幅は北側については、溝状遺構の掘り形上面からと思われるが、南斜面では不明であるため、規模を復元できない。この掘り形にともなう道路面は不明であり、硬化面や波板状凸凹も確認していない。遺構内の上層堆積状況をみると、掘り形は南北の丘陵裾から谷底へ落ち込むように堆積した灰～灰黒色土ないし灰褐色土を削

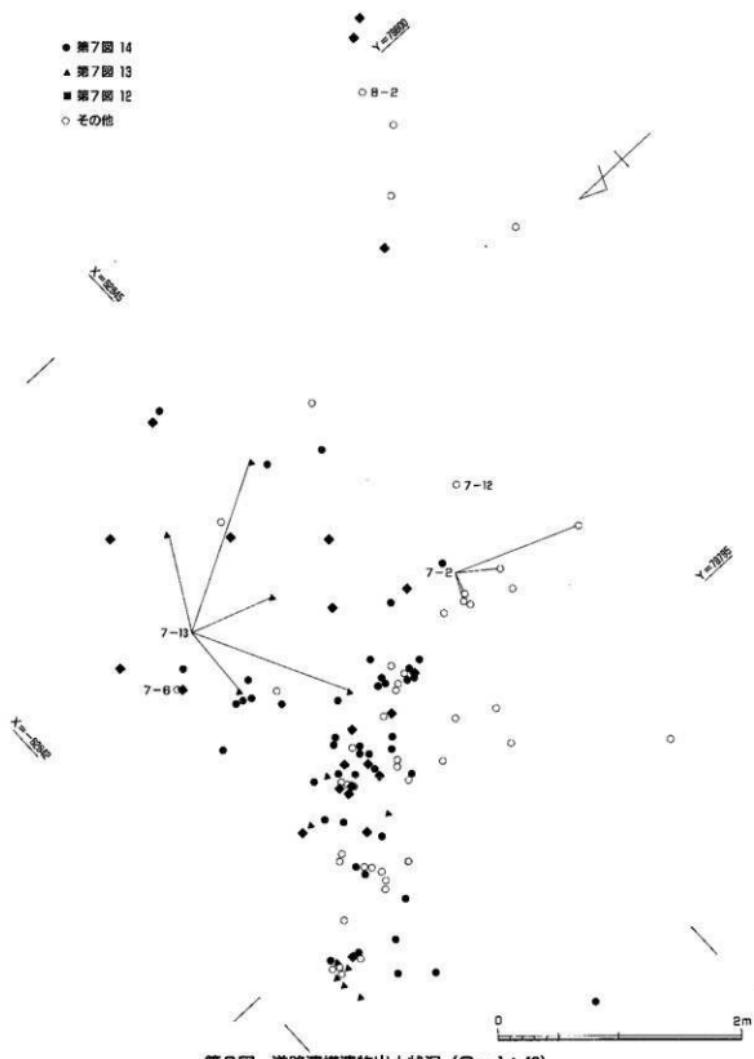


第4図 I区 道路遺構実測図 ($S = 1 : 300$)

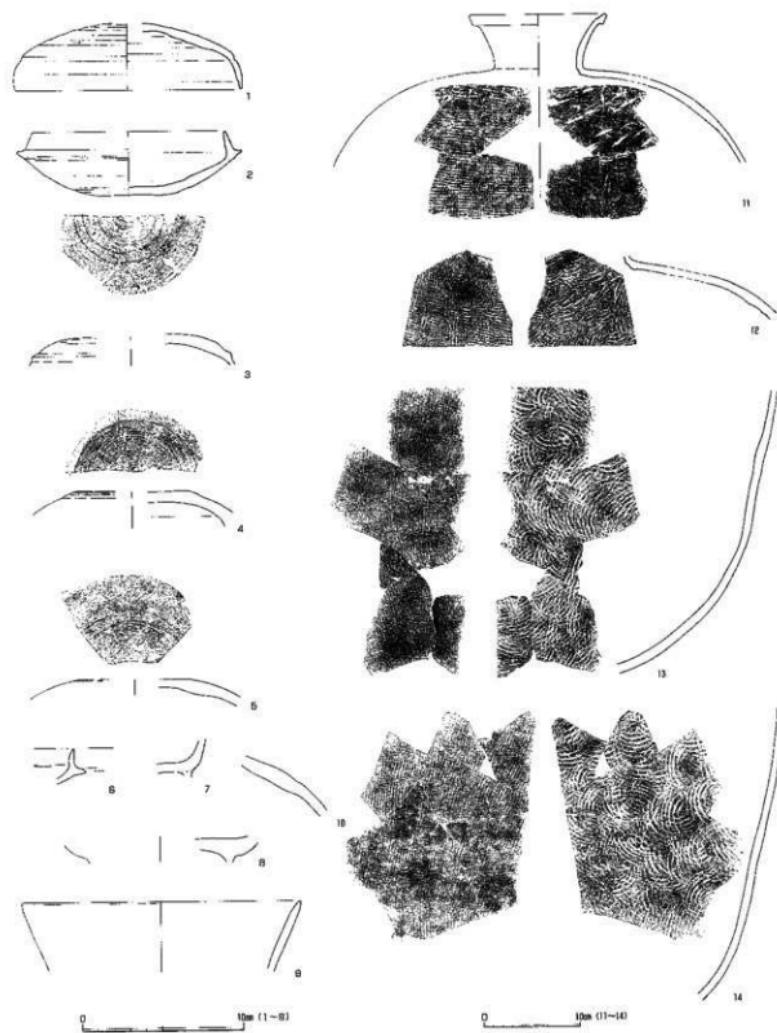


第5図 道路造構土層堆積図 ($\Sigma = 1:80$)

- 第7図 14
- ▲ 第7図 13
- 第7図 12
- その他

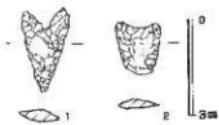


第六図 道路遺構遺物出土状況 ($S = 1:40$)



第7図 I区 出土須恵器実測図 ($S=1:3 \cdot S=1:5$)

り出している。掘り形内には赤茶色土が厚く堆積しているが、A～Cラインの範囲では赤茶色土の下層には黒色土が拡がる。黒色土中には木炭片が混ざる。この層にはわずかに粘質土がブロックとして含まれているものの細かく分けることは出来ない。流れ込んだ時期は不明だが、この層の下位には横穴墓から流出した須恵器がわずかながら混ざり、上位では近・現代の陶磁器が出土する。この赤茶色土



第8図 I区 出土石器実測図 ($S=2:3$)

の下層は、人頭大程度の石を多く含む、おうど色の粘質土が堆積しており、土石流により流れ込んだものと思われる。

遺物は調査区内のA-C間に堆積した黒色土層中よりまとまって出土した。黒色土層中には握り拳大から人頭大までの石が多く見られ、斜面や、谷奥から流れ込み堆積したものと思われる。出土した須恵器のうち第7図10の横瓶は口縁部が3号横穴墓のものと接合できたことから、横

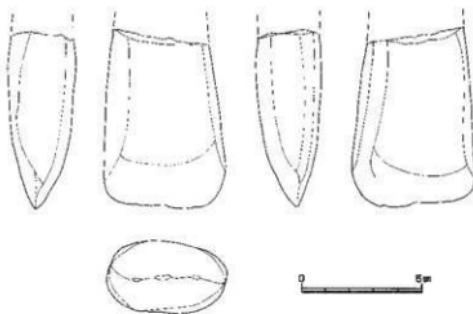
穴墓の墓道から土砂とともに流出したものと断定できた。ただし横穴墓墓道の土層との関係は、溝状遺構のところで途切れおり明瞭でない。

遺物（第7～9図）

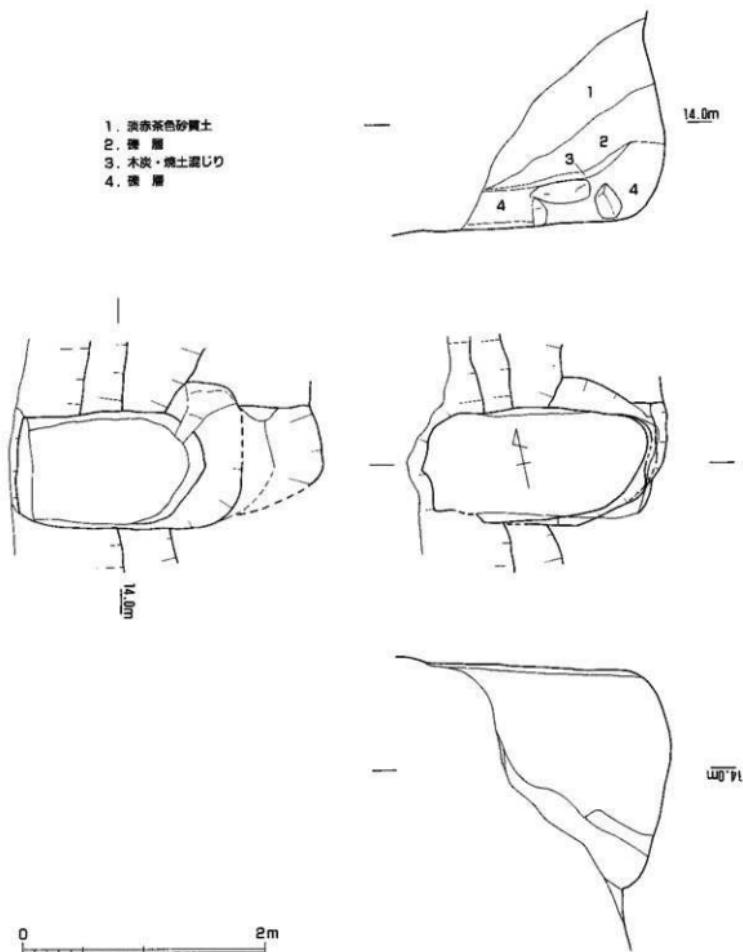
遺物は調査区東半部の黒色土層を中心出土した。第7図の1～14は総て須恵器である。1は須恵器壺蓋。口径14cm、器高4.1cm。口縁端部は沈線を入れ段状に仕上げる。天井部と体部の境には一条の沈線を施す。天井部はヘラ削り調整。2は壺身。口径12.0cm、器高は4.0cm。大井部外面はヘラ削り調整。1、2とも焼成は軟質である。3～5は壺蓋の大井部から体部の一部だが5は壺身の可能性もある。6は壺身の口縁部、7、8は壺身の底部で高台が付く。7は糸切り痕が確認できる。8は軟質である。9は壺の口縁部。口径17.4cm。外面とも回転ナデで仕上げる。10は壺の肩部かと思われる。風化が著しいが、外面には部分的に自然釉が確認できる。11、12は横瓶の口縁部から胴上半部。11は口径14.0cmで、口縁端部は肥厚し外反する。胴上半部の外面は平行叩き後カキ目調整、内面には当て具痕が残る。外面には自然釉がかかる。12は頸部から肩部にかけての部位で、外面は平行叩き後カキ目で内面は当て具痕が残る。13、14は壺の胴下半部である。外面は平行叩き後カキ目、内面には同心円当て具痕がのこる。これら須恵器の時期は山雲4期と思われる。3号横穴墓出土資料との接合関係が確認できた11と合わせて、横穴墓から流出したものと思われる。ただし、7は底部を糸切りによって切り離したもので出雲8期以降に相当し、時期を異にしている。

第8図は、黒曜石製の凹凸式三角形鏃で、2点とも黒色土層中より出土しており完形品ではない。1は全長2.6cm、幅は1.5cm、厚さ0.4cm、重量は0.65g、2は全長1.6cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量は0.54gを測る。第9図は石斧で調査区北斜面より出土した。比較的小ぶりの磨製石斧で、基部を欠くが重量160.52gを測る。

そのほかの遺構（第10図） 谷部の山口にあたる調査区の西端から横穴状遺構を検出した。ここは、調査時に移転していた民家の敷地内にあたり、調査前の聞き取りでは、宅地造成の際に横穴が開口したことであった。調査の結果、入口側から1.88mのところで地山に到達することが分かり、古墳時代の横穴墓を想定することは困難な形態といえる。横穴内には地山の崩落に伴う礫層が堆積し、その直上には宅地造成に伴う開口後のごみ焼却の痕跡（第3層）が確認された。横穴の規模は、奥行



第9図 1区 北西斜面出土石斧実測図 (S=1:2)



第10図 横穴状造構実測図 ($S=1:40$)

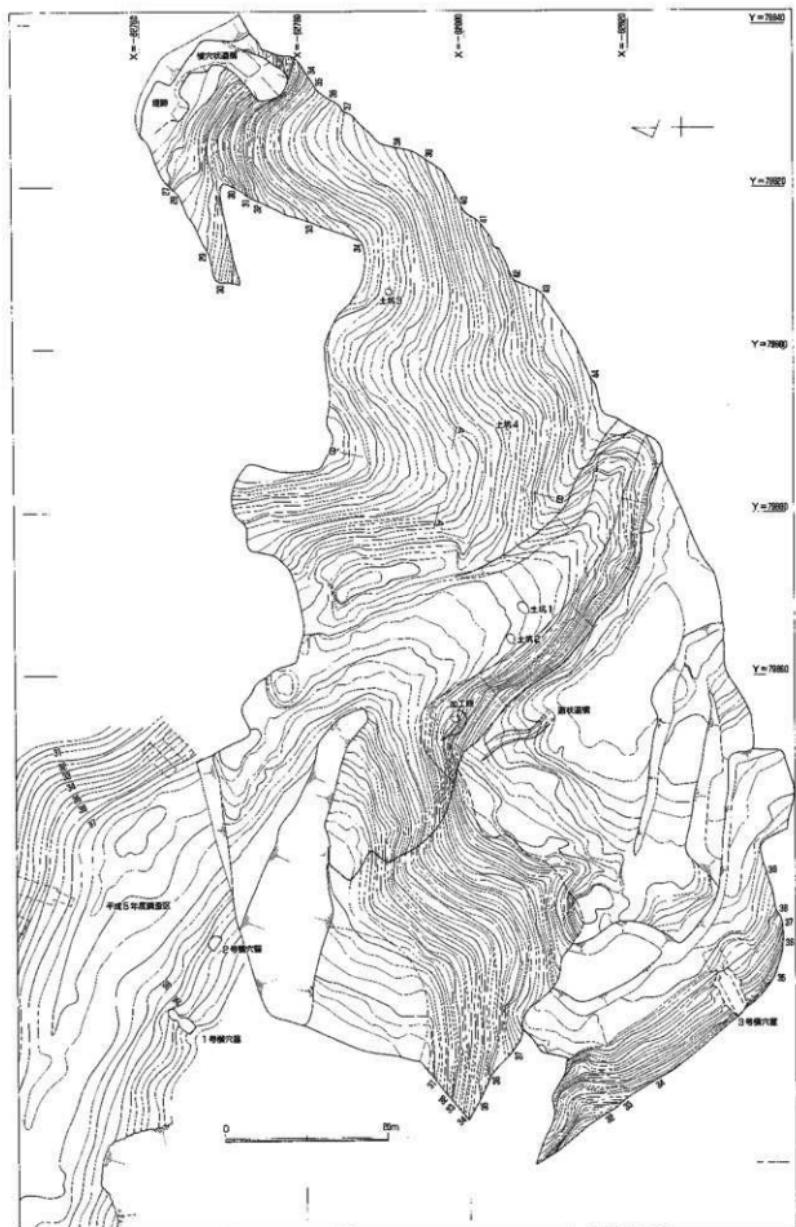
き1.88m、幅0.8m、高さ1.0mである。底面は入口側から奥側にわずかに高くなる。造構の時期を決定する出土品は無い。

(注2) 須恵器の編年については下記の論文に基づいて行った。

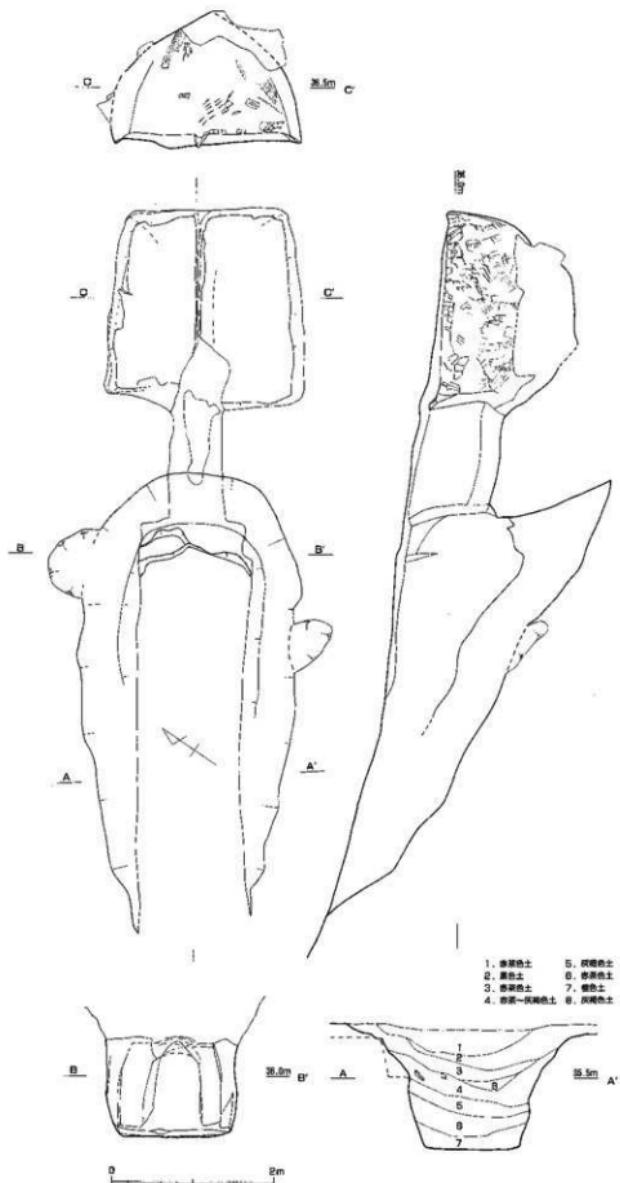
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

第3節 II区・松本3号横穴墓

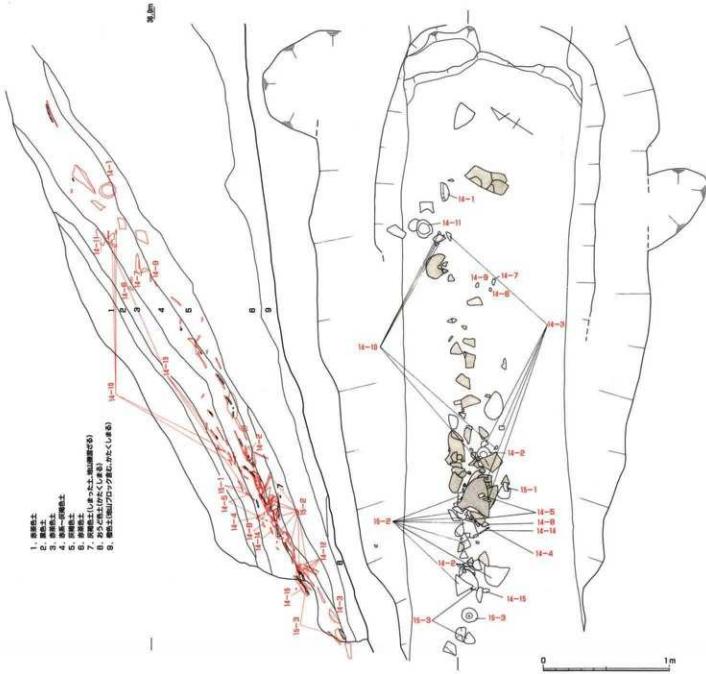
松本3号横穴墓は、南西から北東へと延びる丘陵の南側斜面に位置し、玄室床面での標高は35.9m



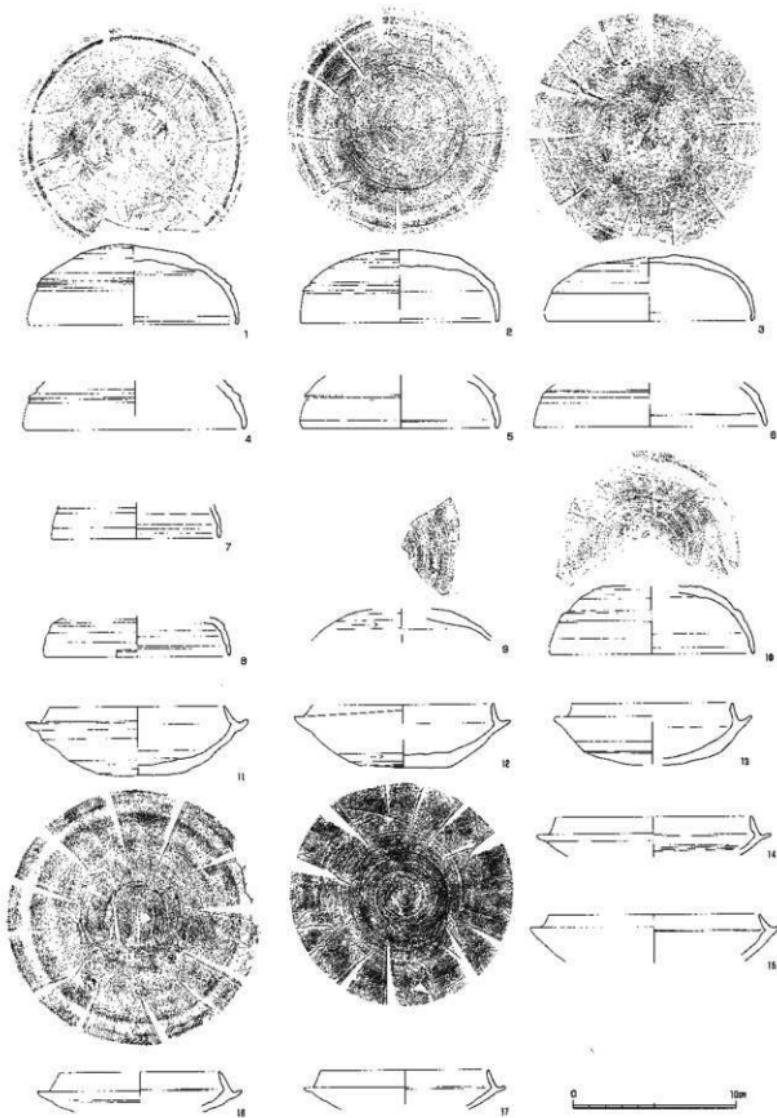
第11図 II～IV区 全体図 (S = 1 : 600)



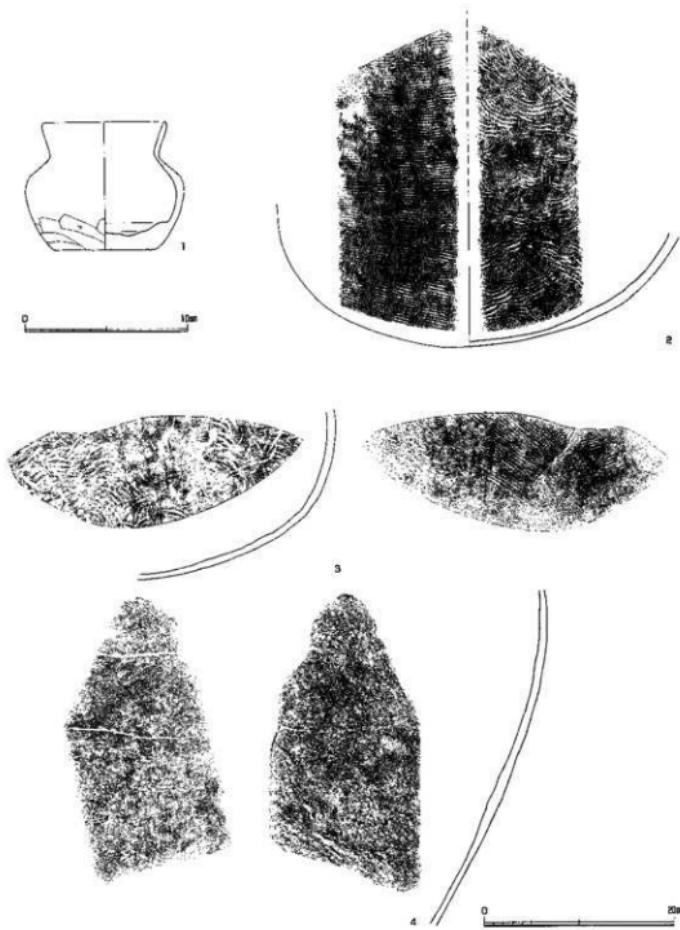
第12図 横穴墓実測図 ($S = 1:60$)



第13図 墓道遺物出土状況実測図 (S=1:30)



第14図 墓道内出土土器実測図(1) ($S=1:3$)



第15図 墓道内出土土器実測図(2) ($S=1:3$ ・ $2\sim 4$ は $1:5$)

を測る。南西方向に向けて開口し、主軸は、N-56° Eである。全長は8.96mを測る。

墓道 狹長な形態で、長さ5.1m以上、幅は玄門側で1.28m、先端で1.38mを測る。断面形は床面から70cm[1]までの側壁は上開きのコ字形を呈し、[1]方は逆ハ字に拡がる。

墓道内土層堆積状況および遺物出土状況 表土下には丘陵部造成にともなうと思われる赤茶色土があり、その下層には旧表土と思われる黒色土がある。さらに自然堆積と思われる赤茶色があり、その下層の第4層、赤茶～灰褐色土より多数の遺物が出土している。この下層の5、6、9層は地山ブロック

表1 墓道内出土土器観察表

件名番号	器種	口径	器高	調 整		備 考
				天井部窓削り後ナデ		
14-1	坏 蓋	13.0cm	4.9cm	天井部窓削り後ナデ		肩部に二条の沈線を施し、突帯を表す。口縁内部に沈線を施す
-2	坏 蓋	12.2cm	4.4cm	天井部窓削り		肩部に二条の浅い沈線を施し、突帯を表す
-3	坏 蓋	12.5cm	4.1cm	天井部窓切り後窓削り		肩部に二条の浅い沈線を施す。口縁部外側に自然釉が高温で溶けタル状になった部分あり
-4	坏 蓋	(12.4cm)		天井部窓削り		肩部に二条の沈線を施し、突帯を表す
-5	坏 蓋	(13.6cm)				肩部に二条の沈線を施し、突帯を表す
-6	坏 蓋	(12.0cm)				肩部に沈線を施し、突帯を表す
-7	坏 蓋	(14.2cm)				肩部に浅い沈線と深い沈線を施す。口縁部内側にも沈線を施す
-8	坏 蓋	(10.2cm)				肩部に沈線を施す。口縁部内側にも沈線を施す
-9	坏 蓋			天井部窓削り		
-10	坏 蓋	(11.4cm)		天井部及び口縁部窓削り		重ね焼きのため口縁端部外側に接した上器の破片が溶着する。肩部に沈線を施す。口縁内部にも沈線を施す
-11	坏 身	10.8cm	4.2cm	底部窓削り		底部に擦状の傷あり
-12	坏 身	11.1cm	3.9cm	底部窓切り後窓削り		焼成時に歪みが生じ、湾曲している
-13	坏 身	(9.8cm)				ザラザラした黄褐色の部分と、自然釉のため黒灰色に変色した部分に分かれる。口縁部内側立ち上がり部に沈線を施す
-14	坏 身	(12.0cm)		底部窓削り		
15	坏 身	(10.0cm)				口縁部内側立ち上がり部分に沈線を施す
-16	坏 身	(10.4cm)				口縁部内側立ち上がり部分に沈線を施す。底部外面に自然釉がかかり濃青灰色に変色する
-17	坏 身	(13.0cm)				口縁部内側立ち上がり部分に沈線を施す
15-1	短頸壺	6.4cm	7.9cm	底部窓削り 体部下方手持ち窓削り		
-2	横瓶?	14.4cm		休部内面は同心円状の当て具痕があり、外部は平行叩き痕がある		口縁部外面の一部に自然釉がかかり濃緑色に変色
-3	横瓶			休部内面は全体に同心円状の当て具痕があり、その後ナデ。外部も全体に平行叩き痕があり、その後カキ付がある		全体的に自然釉がかかり緑灰褐色変色している
-4	壺			体部内面は同心円状の当て具痕があり、中央部分は回転ナデによって当て具痕が消されている。外部は全体に平行叩き日痕が施され、体部両端にカキ目痕あり		焼成不良で、土師質を呈する

クを含んだ非常にしまった土層であることから最終埋葬後の埋上と考えられる。また墓道先端側のみ見られた8層は多量の地山ブロックからなり、あるいは追葬時に搔きだし整地した際のものかもしれない。須恵器は5層上面で広範囲から山上していたが、先端側の、史に言えば中軸線より左側が密であった。なかでも15図4の軟質の壺片は敷き詰めたかのような拡がりを見せている。

玄門 長さ1.36mと細長く、幅は玄室側で0.59m、墓道側で0.64mを測る。天井部は部分的に崩落しているが、高さは0.72~0.77mで、床面からじ字形をなす。断面形は台形を呈するが、墓道側は天井部が崩されている。あるいは追葬時に用いられたものかもしれない。玄門部は大小約90個の自然石によって入念な閉塞がなされていた。

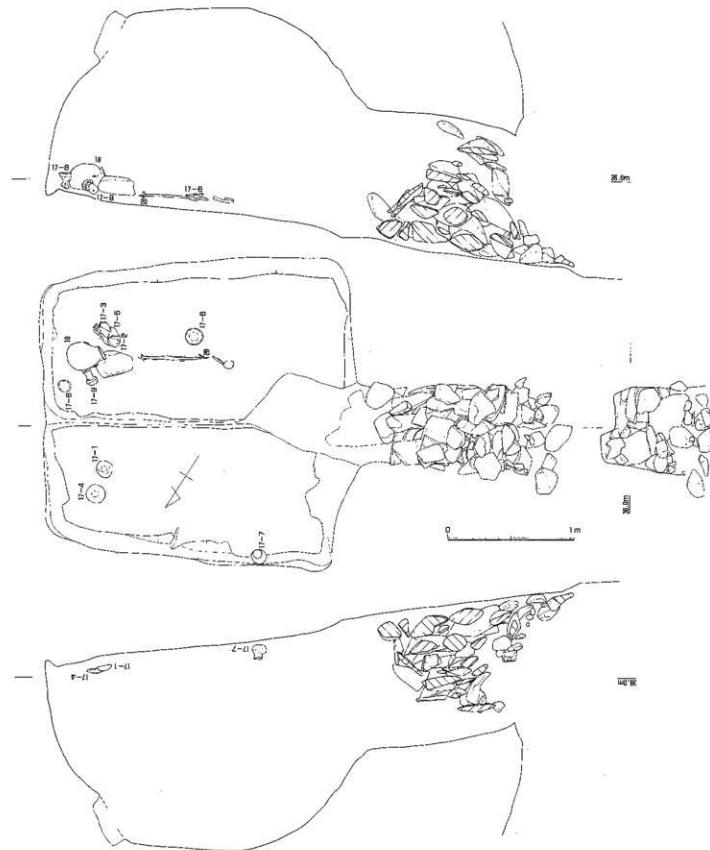
玄室 玄室は天井の一部と左壁の玄門寄りが崩落している。平面は台形を呈し、玄門側が広く、奥壁側が狭い。規模は長さ2.5m、幅は奥壁側で2.0m、玄門側で2.45mを測る。天井は、側壁との界線を表現しないテント形で、高さは1.55m。側壁、奥壁とも内傾して立ち上がる。床面には、中軸線上と周囲に幅10cm、深さ5cm前後の排水溝を廻らしている。

前壁、側壁、奥壁とも床面から15cmまでのところは、幅5cm程度の平刃痕が床面と平行に連続して確認できる。その方向は、場所によって異なっており、側壁の前壁との境界付近では前壁に向けて、中央付近からは奥壁方向に向けて一列に並ぶように工具痕が認められる。これは奥壁に向かうほど不明瞭になっている。奥壁では、右側壁との境界付近で右側壁方向に、その他では左側壁に向けて削られている。前壁では玄門部に向けて削られている。床面から15cmより上位は幅8cm程度の平刃痕が見られ、上方から下方に向けて削られていることが分かる。なお、玄室の壁面からは常時、水が滲みだしており、床面は特に脆弱な状態であったため充分な観察はできなかった。

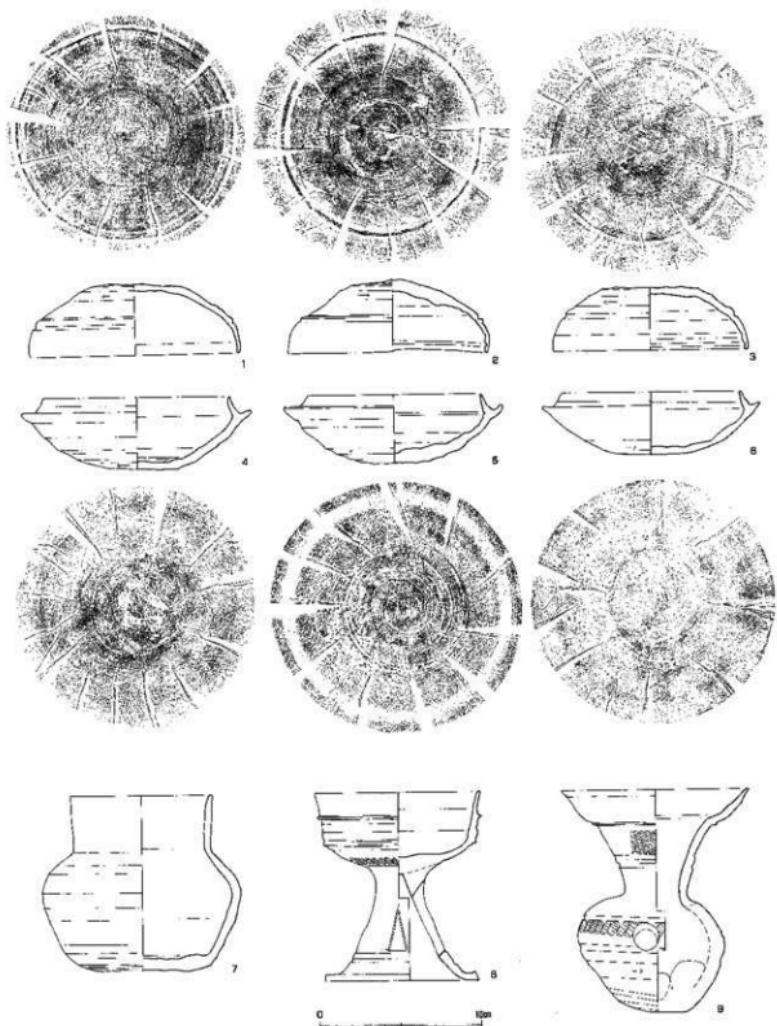
玄室床面遺物出土状況（第16図） 中軸線左側の奥壁付近から須恵器壺蓋（17図1）と壺身（17図4）が出土し、やや離れて左側壁の溝上から短頸壺（17図7）が出土した。壺蓋は正位で壺身は天地逆にして置かれていた。中軸線右側からは、壺蓋、壺身が2セットと高壺、胞、提瓶のか太刀1点が出土した。17図5の壺身は伏せた状態で置かれており、その上に押しつぶされた状態で17図5の壺身が重なるように出土した。また17図3の壺蓋は天地逆に置かれており、約50cm離れて17図6の壺身も天地を逆にして出土した。17図8の高壺は奥壁に沿う溝の手前に置かれており、9の胞、10の提瓶は横転した状態で出土した。提瓶の下の石は地山に包含されていたものが、崩落したもので、抜け落ちた痕跡は天井に明確に残されていた。この石の周囲にも、同程度の石が落ちていたことから、この崩落の衝撃で提瓶が横転したとも考えられ、当初は正位置で立て並べていたものと思われる。大刀は、中軸線に平行して先端を玄門側に向けて置かれていた。このほか刀子2点と鉄鎌3点が出土しているが、いずれも出土地点は不明である。

墓道内出土遺物（第14~15図） 第14図1~10は壺蓋、11~17は壺身である。壺蓋は口縁端部に沈線を施すものと端部の上方に沈線を施すものが見られる。肩部は1が突帯を表現する以外は沈線のみである。天井部はヘラ削り。壺身は良好な遺存状態のもののが少ない。12は底部ヘラ切り後ヘラ削り。第15図1は短頸壺。口縁部は外反して立ち上がる。胴下部は雑なヘラ削り、底部はヘラ切り。2、3は横瓶。2は胴下半部。外面は平行叩き後カキ目。内面には当て具痕が残る。3は肩部で内面は当て具痕を回転ナデで消す。5は甕かと思われる。赤黄褐色で軟質である。時期は山雲4期。

玄室内出土遺物（第17~20図） 第17図1~3は壺蓋。1は口縁端部をナデによって段状に仕上げる。

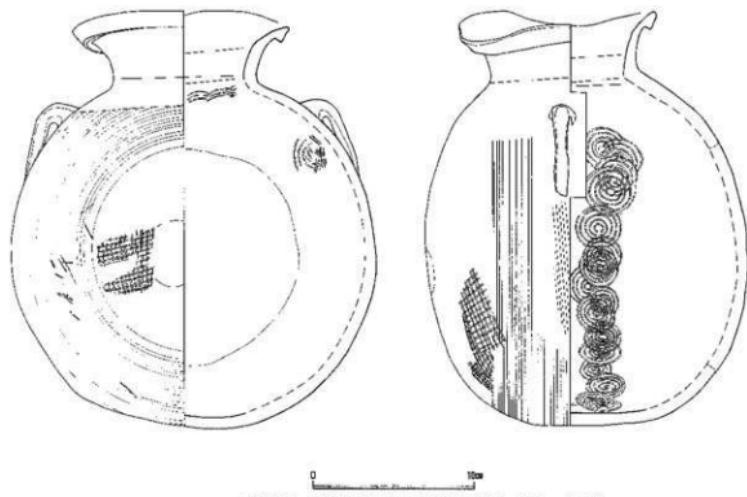


第16図 玄室内部物及び閉塞石出土状況実測図 (S=1:30)



第17図 玄室内出土土器実測図(1) ($S=1:3$)

肩部は一条の沈線で突帯を表現する。2は口縁端部に一条の沈線を施すもので、肩部は二条の沈線で突帯を表現する。3は口縁端部を沈線を施した後、ナデで仕上げている。肩部には二条の沈線で突帯を表現している。天井部は1、2がヘラ削り、3がヘラ切り後ヘラ削り。4～6は环身で、口径10.6～



第18図 玄室内出土土器実測図② (S=1:3)

表2 玄室内出土器観察表

掲出番号	器種	口径	器高	調 整	備 考
第18-1	坏 盖	13.0cm	4.4cm	天井部窪削り	天井部にヘラ記号あり。口縁部に沈線を施す
- 2	坏 盖	11.6cm	4.6cm	天井部窪削り	肩部に二条の沈線を施し、宽带を表す
- 3	坏 茶	11.8cm	3.8cm	天井部窪切り後窪削り	肩部に沈線を施す
4	坏 盖	11.6cm	4.5cm	底部窪切り後窪削り	窪切りによる平行状のかき痕が残る。焼成やや不良
- 5	坏 盖	10.6cm	4.2cm	底部窪削り	
- 6	坏 盖	10.9cm	3.9cm	底部窪削り	
- 7	短頸壺	8.9cm	10.8cm	底部窪切り後窪削り。ただし窪切りの跡が大きいため窪削りがはっきりしていない	肩部及び内部の底に自然釉
- 8	高 坏	10.2cm	11.6cm		坏部に突線二本、脚基部にクシ状工具による刺突文を施す。脚部に二条の沈線と三方向の一殷透しを持つ。坏内部の底に薄く自然釉付着
- 9	壺	11.4cm	13.7cm	体部下方より底部にかけて窪削り	1) 頸部上より突線、波状文、二条の沈線あり。体部沈線間にクシ状工具による刺突文を施す。口縁内部及び底内部に自然釉付着
第18図	提 瓶	13.5cm	25.8cm	体部内面は同心円状の当て具痕があり、その後ナデ。外面も全体に平行叩き痕があり、その後カキ凹がある。	体部外面上にカキ痕あり

11.6cm。7は短頭壺。口径8.9cm、器高10.8cm。底部はヘラ切り後、ヘラ削り。8は高壺。壺部に二条の尖帯を廻らす。このうち下方の突線は二条の沈線によって尖線を表現している。壺部と裾部の境にはクシ状工具による刺穴文を廻らす。脚部には三角形の一透しを三方向にもち、透し下には二条の沈線を施す。9は甌。頭部には波状文と二条の沈線文を施す。体部は二条の沈線とその間にはクシ状工具による刺穴文を廻らす。底部は円みをもち安定を欠く。体部下半から底部にかけてヘラ削り調整。18図は提瓶。口縁部は二重口縁で焼け歪みにより、ゆがんでいる。環状の把手は、上側の付け根をしっかりと固定する。体部外面は平行叩き後カキ目。内面は同心円で呂痕を明瞭に残す。これら遺物の時期は出雲4期と思われる。

第19、20図は鉄製品。19図1は刀子で刃部と茎部の間を欠く。刃部も先端をわずかに欠くが、復元した長さが9.5cm。2は刀子の茎部で木質が残る。3～5は鉄鎌。3は鎌身関部から莖部。関部は撫関で、莖部は纖維かと思われるものが巻かれている。4は鎌被から茎部で、莖部には木質が残る。鎌被は棘鎌被。5は2本の鎌の棘鎌被の鎌被から莖部が重なっている。第20図は大刀。全体に鋸が進行しているが特に刃身部は鋸ぶくれが著しい。莖尻部を欠くが、残存長73.4cm、刀身長67.9cm、刀身幅3.0～3.3cm、最大厚0.8cm。刃身部は反りを持たない直刀で、切先はふくらがはる。鍔金具は円形で直径6.8cm、短径6.0cm、厚さ0.4cm。茎部との境は片側で幅3.3cmの鞘口金具をもつ。莖部は現存長5.5cm、幅1.7cmで端部には目釘穴と目釘が1か所確認できる。

第4節 III 区

層序（第21図） 遺物が比較的まとまって出土した丘陵緩斜面の層序について見てみる。表上下には谷筋を掘削し緩斜面側

に押し流した造成土

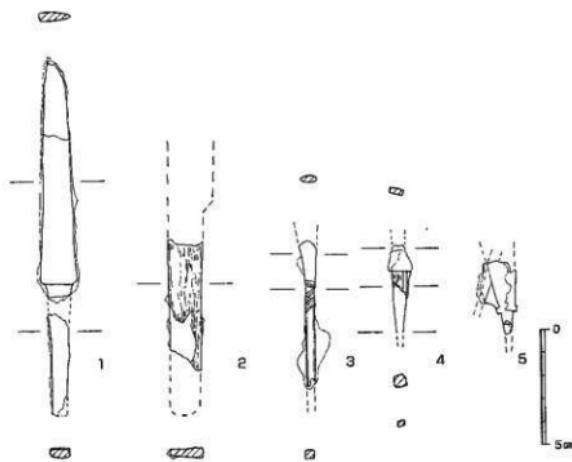
（灰～灰褐色土）

が堆積し、その下層が旧表土に相当するものと思われる黒色土が見られる。この旧表土中および、6、7層から遺物が出土している。

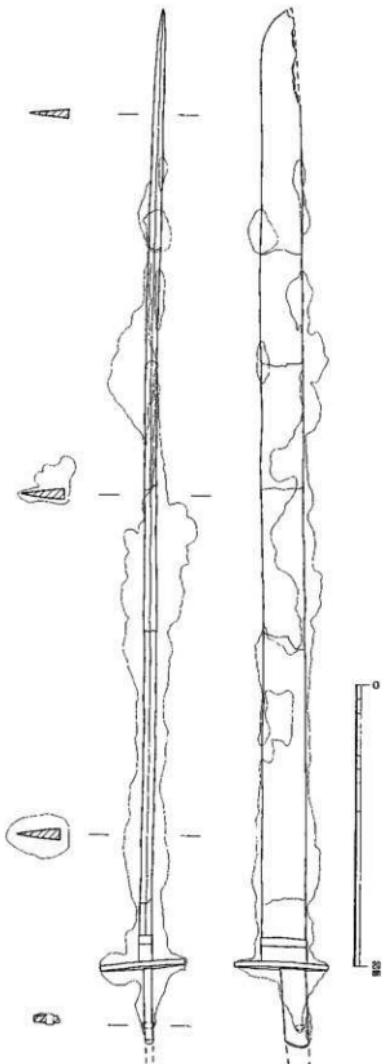
遺構（第22～25図）

道路遺構1、上坑4、加工段1を検出した。道路遺構は、丘陵頂部に向けて尾根筋を通るもので、全長は8.8mあまりで、幅は1.0～

1.3m。加工段は丘陵東斜面をL字形にカッ



第19図 玄室内出土鉄器実測図(1) (S=1:2)

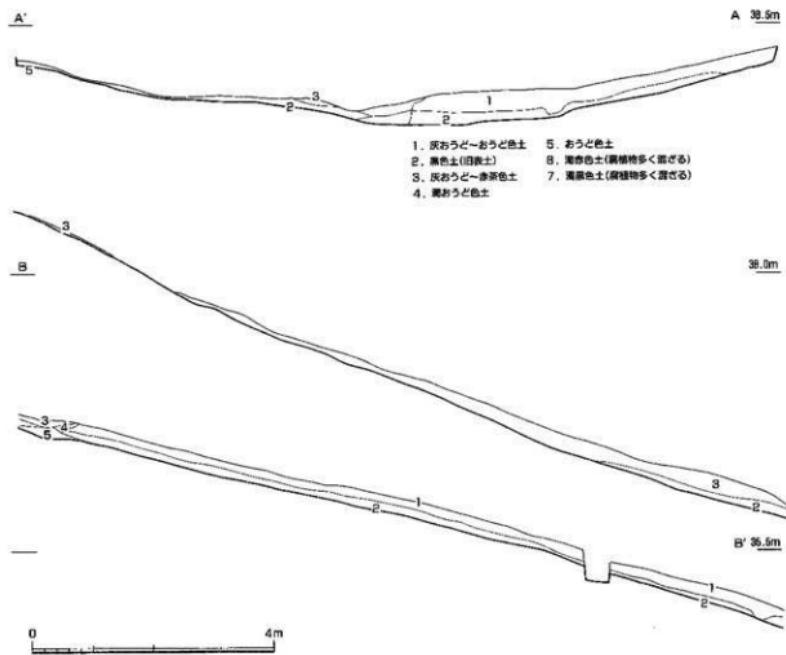


第20図 玄室内出土鉄器実測図 ② (S = 1:3)

トして造成しており、東西4.4m、南北1.4mを測る。加工段の東寄りには浅い皿状の土坑1基が付随して存在する。土坑の規模は東西0.6m、南北0.72m、深さ0.1m。土坑内からは木炭粉、焼土塊が出土している。土坑4基のうち2基は谷筋の硬い岩盤に掘り込まれた人形のもの(01、02)で、残りの2基は緩斜面に位置する小形のもの(03、04)である。SK01は一抱え以上もある大きな石を伴うもので、南北1.0m、東西1.18m、深さ0.34m。SK02は、土坑内に石を伴い、石の隙間にあたる北東部分からは比較的まとまって木炭粉が出土した。石、土坑壁とも焼けた痕跡は確認できていない。SK03は径0.86mの円形の土坑。北壁がわずかながら火を受けた痕跡が認められた。SK04は南北0.44m、東西0.7m、深さ0.2mの浅い土坑。時期は不明である。

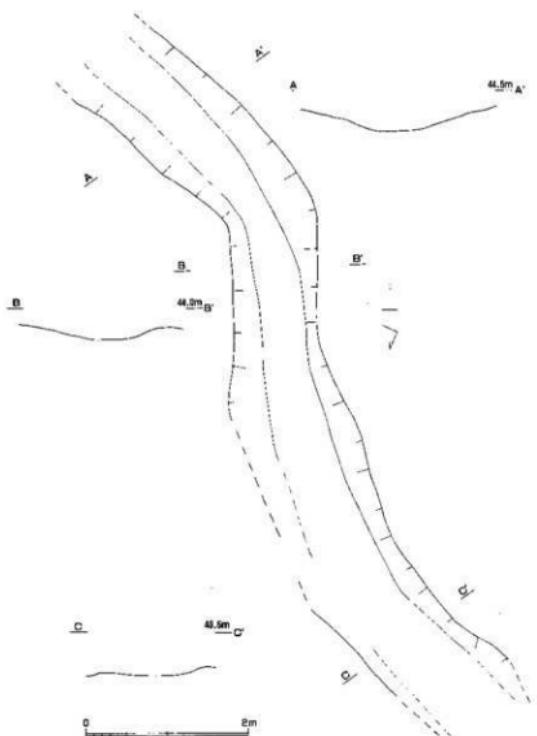
遺物(第26・27図) 第26図1は石匙。刃部端をわずかに欠くものの遺存状態は良好である。つまみ部分合めた長さは4.6cm、幅は6.6cm、厚さは1.0cm、重量は30.34gを測る。2は着刀製の縦長の剥片で、側面と先端側(図面下側)に2次加工がなされている。全長3.9cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm、重量は8.17gを測る。3は磨製石斧で基部から刃部の一部を除いて欠失している。表面は丁寧に研磨している。第27図1~3は縄文土器。1は後期初頭の中津~福田K2式併行。外面には太い沈線文を施す。2は晩期の突帯文土器。風化が著しいが、内外面にわずかにナデの痕跡が見られる。3は底部で、高台状

を呈する。4から9は弥生土器。4は鼓型器台の口縁部から頸部あるいは高环の腹部。2条の擬凹線文を施す。5は鼓型器台の口縁部で、4条の沈線文を施す。後期前葉。6は壺の口縁部。端部は円く、

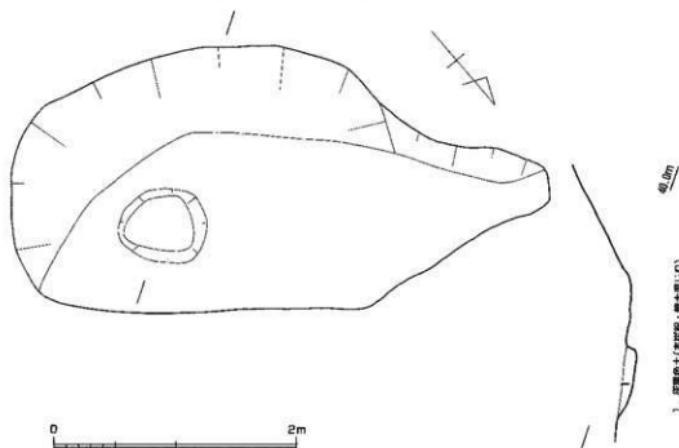


第21図 III区 土層堆積図 ($S=1:80$)

穴山部の稜は鋭い。7、8は高环の筒～榼部かと思われる。外面はタテ方向のハケ、内面は筒部がタテ方向のナデ、榼部はヨコ方向のヘラケズリ後ナデ。器壁は厚い。9は底部。外面に黒斑が認められる。底径8.2cm。10から20は須恵器。10～12は坏蓋。10は天井部がヘラ削り後回転ナデ。11は口縁端部が下方に折れ曲がる。12は輪状つまみを有し、端部にかえりを持つ。口径15.3cm、器高1.7cm。13、14は坏身で底部外面は回転糸切り。13は外方に踏ん張る高台を有する。15は壺の口縁部かと思われる。口径10.6cm。16～19は壺の胴部。20は壺の口縁部。外面には一条の浅い沈線を施している。時期は10が出雲4期、11～13は出雲7～8期に相当するものと思われる。



第22図 道路状況実測図 ($S = 1:60$)



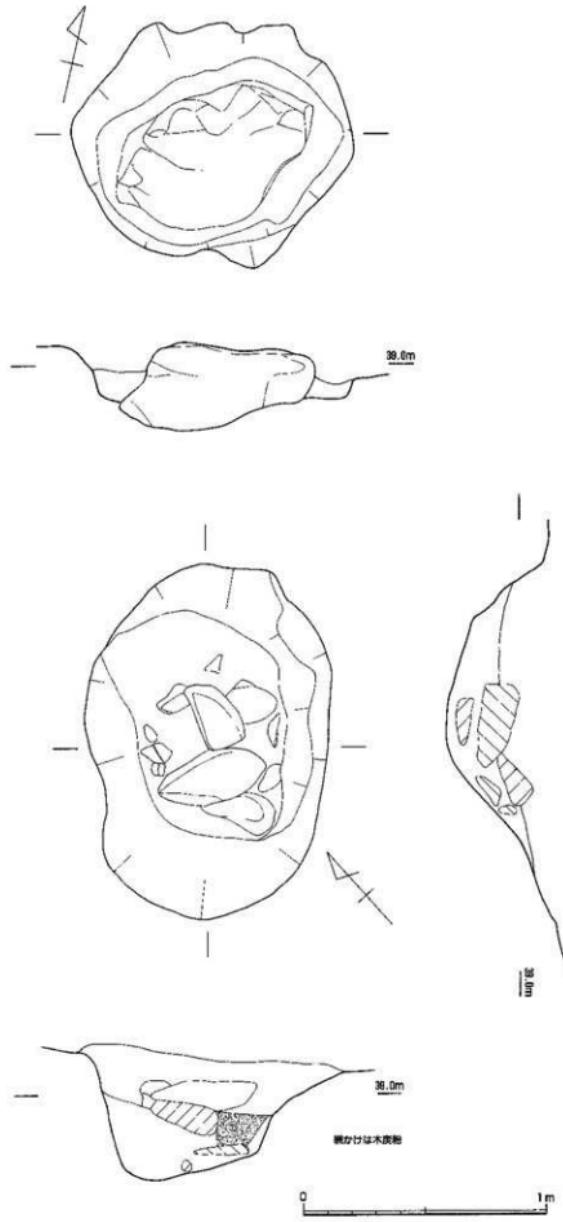
第23図 加工段実測図 ($S = 1:40$)

第5節 IV 区

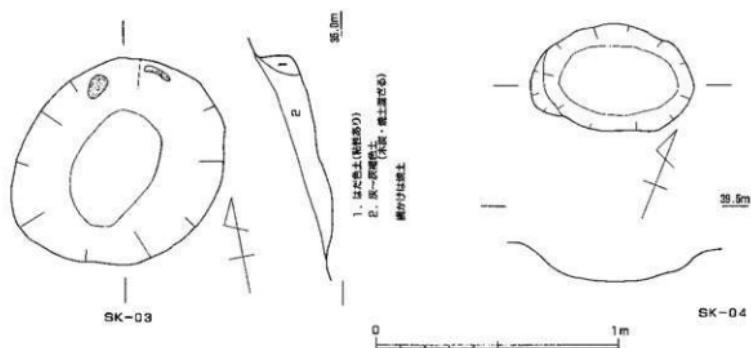
IV区は屋形池の西側丘陵部に当たる。検査した遺構は堤跡と性格不明の横穴状遺構である。

横穴状遺構丘陵斜面から裾部を凹状に掘り込んでいる。壁面は階段状に加工されており、2段目までは確認できたが、その後、調査区壁の崩落等もあり、記録は作成できなかった。幅は3.7~5.0m前後で深さは6.6m以上。横穴内に堆積した5層より下層はグライ化していた。なお、横穴の壁面には幅0.58m、高さ1.1m、深さ0.08mほどの掘り込みが確認できるが、横穴の主軸と一致していないことから後世の掘削の可能性を想定したい。

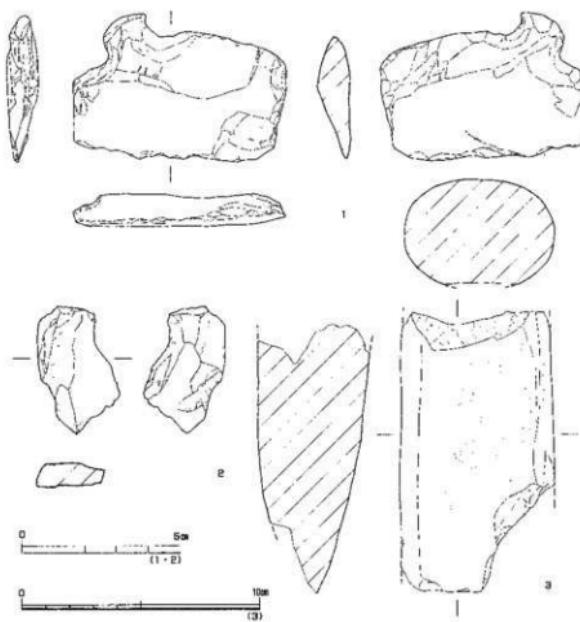
堤跡 丘陵裾部を幅3.1m、奥行き1.7m、高さ1.6mに渡って掘り窪め、そこを起点として堤を構築している。堤跡の高さは既に失われているため不明だが、礫層と粘質土を互層状に積み上げた堅牢な造りである。堤の起点となっている凹地造成によって生じた地山の土も、この堤の版築で使用されたものと思われる。構築の時期を示す遺物は無いが、堤内より須恵器壺片1点が出土している。



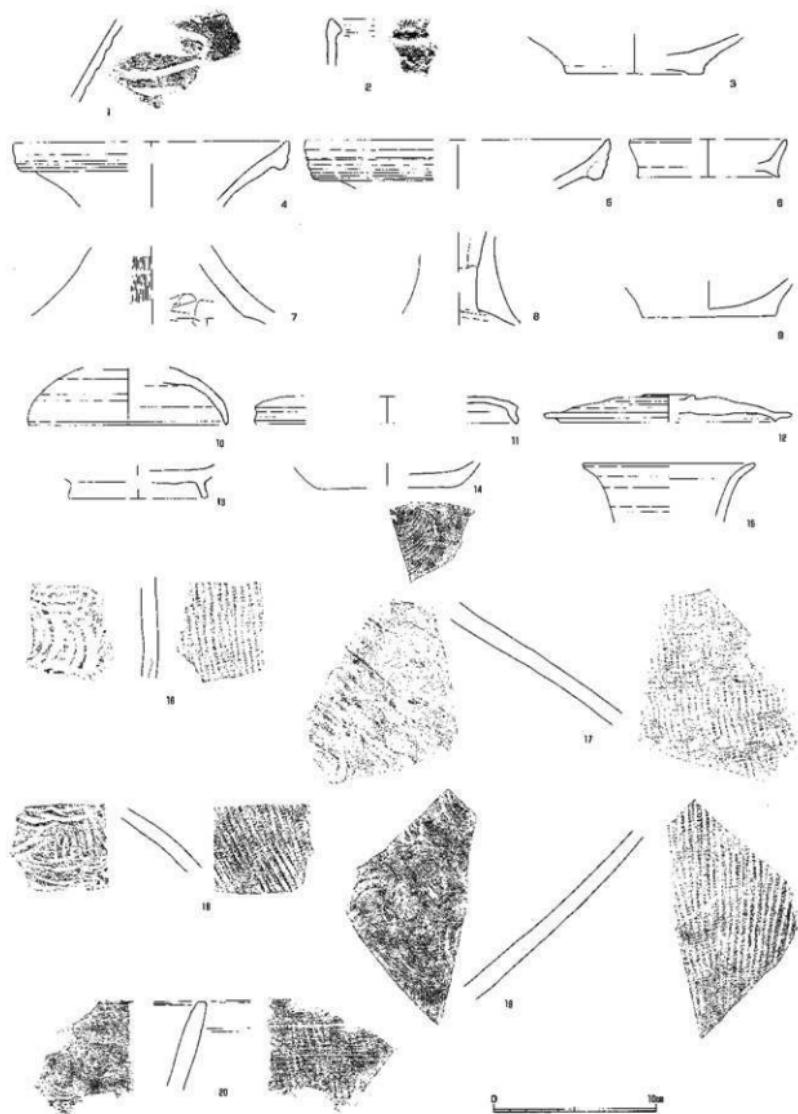
第24図 土坑実測図(1) ($S=1:20$)



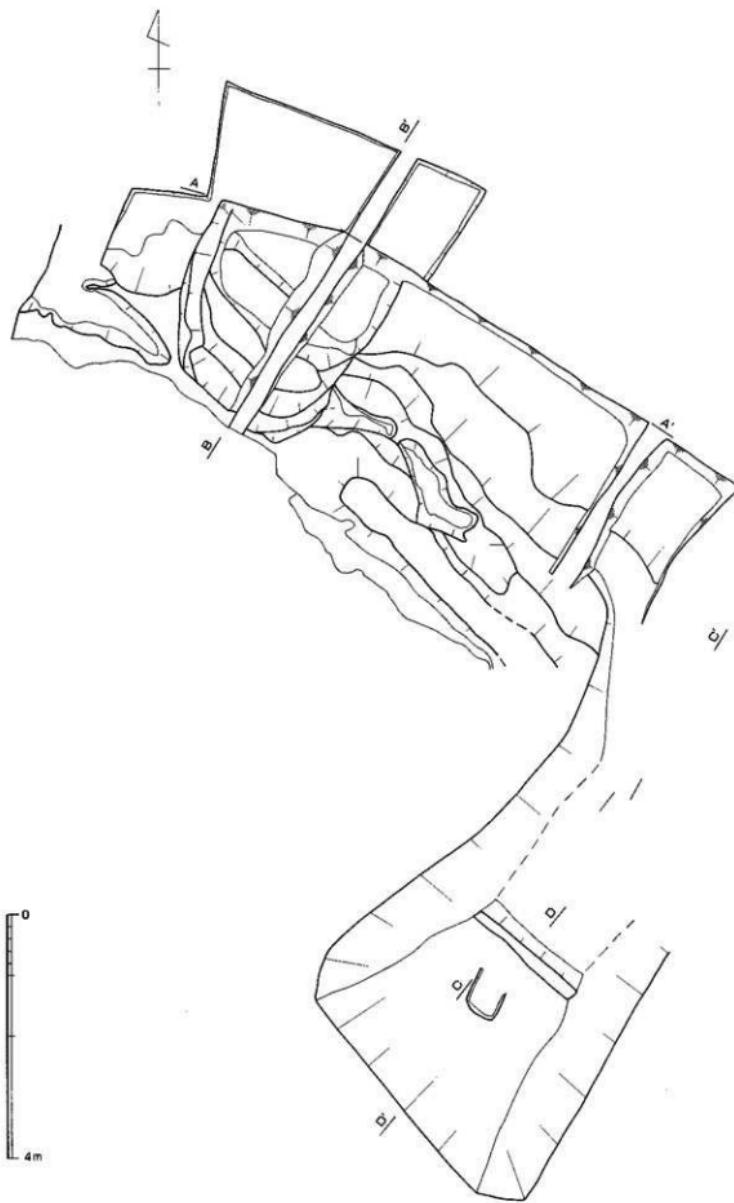
第25図 土坑実測図 (2) ($S = 1:20$)



第26図 III区出土石器実測図 ($S = 2:3$ · $S = 1:2$)



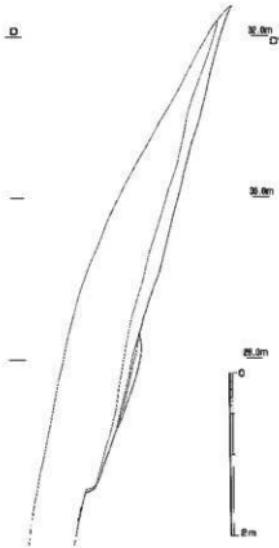
第27図 III区出土土器実測図 (S=1:3)



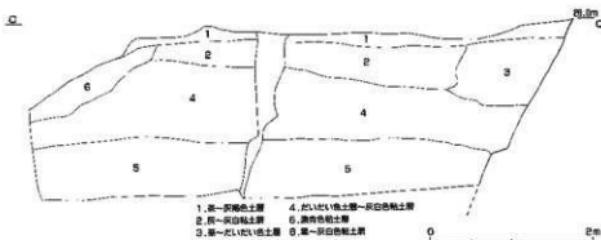
第26図 IV区 遺構全体図 ($S = 1:80$)

第6節 IV 区

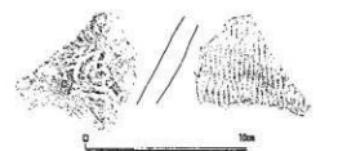
丘陵頂部からやや北に下がった丘陵斜面に当たる。炭焼に関係すると思われる遺構1基と性格不明の大形土坑2基、小形の土坑2基を検出した。SX 01は幅0.6m前後、長さ1.7mの細長い土坑。2段掘りで、底面には指頭大程度の焼上塊が厚さ8cm程度堆積していた。同様の焼土塊、木炭粉は谷側に向けて拡がっており、焼成後の炭が、谷部に向けて掻きだされたものと思われる。SX 02は、いびつな形態の浅い土坑で、木炭粉、焼土塊を伴わない。SX 03は二つの土坑が浅い溝で連結している。SK 01、02は、これら遺構の北東に位置している。それぞれの規模はSK 01が長径0.6m、短径0.4m、深さ0.16m、SK 02は長径0.48m、短径0.32m、深さ0.15m。出土遺物は無いため時期は不明である。



第29図 横穴状遺構断面図 (S = 1:60)

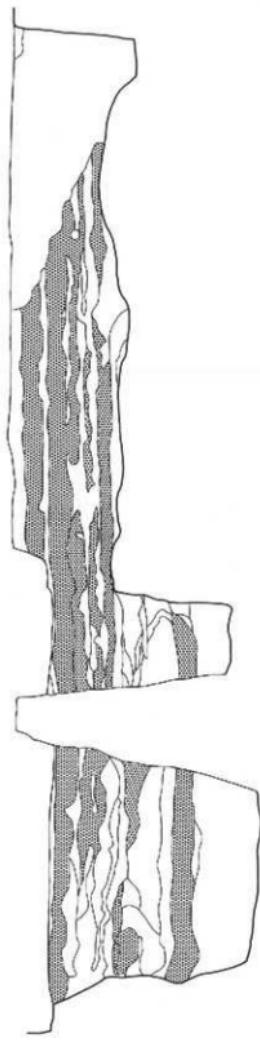


第30図 横穴状遺構土層堆積図 (S = 1:60)

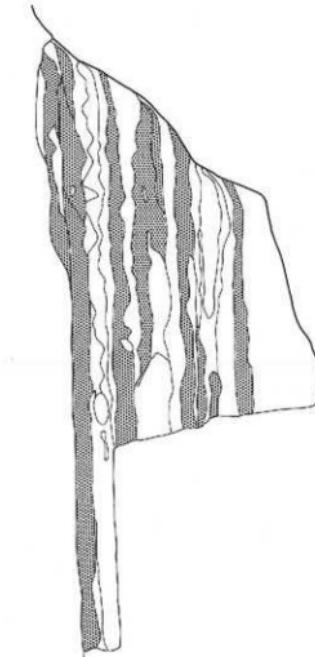


第31図 堤跡出土須恵器実測図 (S = 1:3)

35 km A'



35 km B'

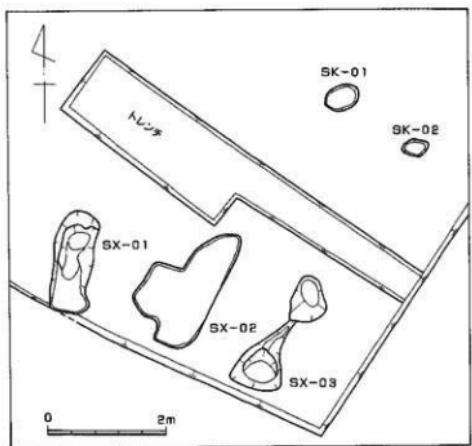


B

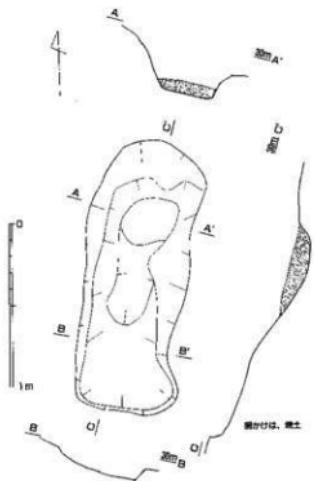
●緑色粘土層
その他の複数の土層

2m
0

第32図 堤跡土層堆積図 ($S = 1:40$)



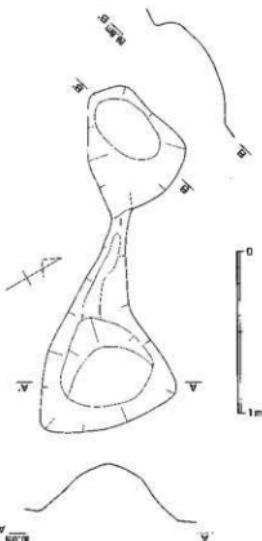
第33図 V区 遺構配置図 (S=1:80)



第34図 SX01実測図 (S=1:30)



第35図 SX02実測図 (S=1:30)



第36図 SX03実測図 (S=1:30)

第7節 小 結

I 区で検出された道路跡は谷筋を整形した切り通し状造構である。丘陵部での道路造構の調査例は少ないが類例としては東京都多摩市の打越山遺跡^(注3)が挙げられる。打越山遺跡は丘陵部を通る道路造構であり、掘り形の西側に壘状の部分を有している点が異なるものの、掘り形の形状は良く似ており、側溝をもたない点も共通している。また、調査区外を見ると現在も使用されている道の両側の30cm高くなつたところで平坦面が見られる。この平坦面の両端で計測すると幅8~10mの道路が想定山来る。調査区内で見られる平坦面や斜面の造成との関連は不明と言わざるを得ないが、道路造構の変遷を検討する上で一つの手がかりになるものと思われる。

この道路造構の所在する谷部は、古代山陰道正西道の推定ルート状にあたることが指摘されていた。^(注4) 造構の時期は不明であり、造構の形態も人工的な掘り形を確認したに過ぎず、今後の充分な検討が必要と思われる。島根県内での道路造構の調査例としては、近年、道路底面が連続した楕円形のピットをなすものが報告されているものの、本遺跡のような掘り形を有するものについては報告されていない。今後の類例の増加を待ちたい。

またII区で検出された3号横穴墓は、出雲4期にあたる。調査区内では1基のみしか検出していないおらず単独で存在しているものと思われる。北側丘陵では1、2号横穴墓の2基が調査されているが、3号墓とは同時期と考えられる。副葬品について1、2号横穴墓に較べると大刀をもつなど優位性が窺える。忌部川流域では菅沢谷横穴墓群、弥陀原横穴墓群などが調査されている。今後周辺地域の横穴墓を含めた後期古墳について検討を加え、当横穴墓群の位置付けをする必要があるものと思われる。

(注3) 多摩市遺跡調査会『打越山遺跡～エクセレント桜ヶ丘建設に伴う調査～』1995

(注4) 中村太一「『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路－意宇郡を中心として－」『山陰古代史研究』第2号 1992

(注5) 下記の報告書にまとめられている。

島根県教育委員会 建設省松江国道工事事務所 『淡山池遺跡・原ノ前遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 西地区VII』 1997

(注6) 松江市教育委員会 (財) 松江市教育文化振興事業団『菅沢谷横穴群』1994

(注7) 岡崎雄二郎、飯塚康行「松江・弥陀原横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第XVII集 1991

松本古墳群（I区）調査に伴う花粉分析（概報）

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

はじめに

本報は、発掘調査に伴い露出した掘削壁面での各層準の堆積時期の推定、および周辺地域での古植生の推定を目的として、島根県教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した分析調査の概報である。

また、松本古墳群は松江市の南西部、乃木福富町地内に分布する古墳群である。

分析試料および分析方法について

試料はI区東壁（図1）において、川崎地質株式会社が採取した。採取地点の模式柱状図および試料採取層準を、図2の花粉ダイアグラム中に示す。

分析処理方法は、渡辺（1995）にしたがった。また検鏡は、光学顕微鏡下で通常400倍、必要に応じて600倍を用いておこなった。

分析結果

分析結果を図2および表1に示す。9試料の分析を行ったが、ほとんどの試料で花粉化石の含有量が少なく、試料No.4では花粉化石が全く検出できなかった。

図2の花粉ダイアグラムでは、検出した種類を*で示し、右に花粉・胞子の割合を示した。表1には、それぞれの検出個体数を実数で示した。

花粉化石の含有量について

前述のように、今回の分析では花粉化石の含有量が少ないために、花粉化石がほとんど検出できなかった。

ここでは、花粉化石の含有量が少なかった原因について2、3の考察を加える。

花粉化石の含有量が少ない原因として、一般には堆積作用による場合と、堆積後の科学的作用による場合が考えられている。

今回の場合、一般に化学作用に強いはずのキク亜科花粉のエキシンが痛んでいるほか（図版参照）、花粉であると思われるがエキシンの構造が全く観察できず、同定不可能な個体が多数検出された

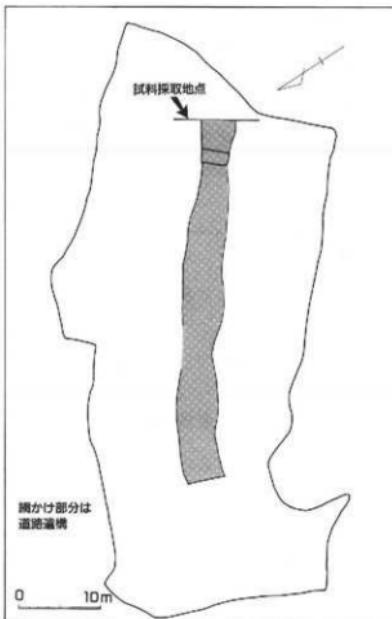


図1 試料採取地点 (S=1:600)

(検出個体数には含まれていない)。また、現地での観察では堆積物が全体的に明褐色を示し、酸化鉄の存在を示唆していた。このようなことから、化学作用による花粉化石の劣化が、花粉化石の含有量が少なかったことの一因であると考えられる。

また、現地調査では試料No2、3層準(6層)上面が旧地表面と考えられている(担当者談)ことから、5層(試料No1)、6層(試料No2、3)については紫外線による花粉の劣化も原因の1つであったと考えられる。

堆積年代の推定

今回の分析では花粉化石がほとんど検出されなかつたものの、後述のように、5層(試料No1層準)堆積時にアカマツ林あるいはコナラ林などの二次林が遺跡周辺を覆っていたことが推定される。大西(1993)では、中海・穴道湖周辺地域でアカマツ二次林が優占する時期は、およそ西暦1500年頃以降と推定されている。したがって、5層(試料No1層準)がおよそ西暦1500年頃以降に堆積した可能性が指摘できる。

一方、5層(試料No1層準)からは、試料採取地点の周辺に分布する横穴墓から流出した、古墳時代の上器が出土した(担当者談)。このことから5層(試料No1層準)は古墳時代以降に堆積したことは明らかである。しかし、調査地周辺の横穴墓が造られた際に、それまでの照葉樹林が伐採され、二次林に置き換わった可能性もあることなど、現状では年代推定を行うための確かな証拠が不足している。

古植生

通常は各花粉帯毎に古植生を主とした古環境を推定するが、今回は花粉化石の検出数が少なく、花粉帯が設定できなかった。このため、通常の方法では古植生の推定は不可能であった。

表1 検出花粉化石個体数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
マツ属(複維管束葉属)	2	1	1						
ツガ属		1							
コウヤマキ属	1								
スギ属	1								
ブナ属	1								1
コナラ属(コナラ亜属)	3	1							
ツツジ科	6								
カヤツリグサ科	1								
イネ科(40ミクロン未満)	1	2							
イネ科(40ミクロン以上)	3	2	1				1		
タテ属(ウナギワカミ節-サナエタテ節)	1							1	
ギシギシ属							1		
キク亜科	4								
ヨモギ属	1					1			
シダ類胞子	372	160	92	53	33	20	133	49	5

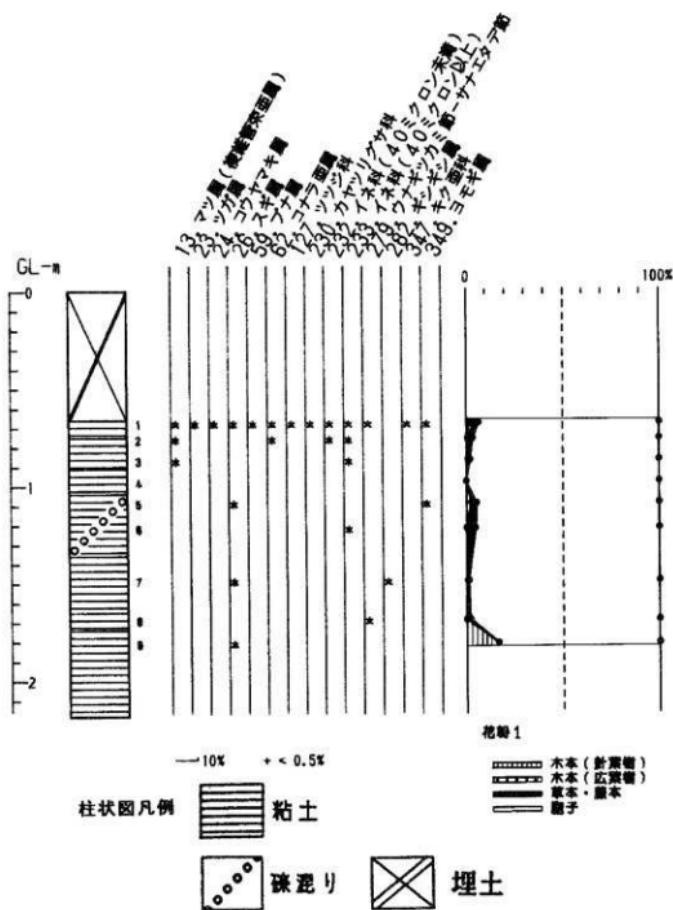


図2 花粉ダイアクリーム

このような中で前述のように試料No.1からは、通常高率になることがごく希なツツジ科の花粉が6個体検出されている。ツツジ科の諸種は、二次林内の低木層の代表的な構成種であるとともに、いわゆる陽樹であることから、照葉樹林内ではほとんど認められない。このことから、試料No.1層準(5層)堆積時にはアカマツ林、コナラ林で代表される二次林が周辺に分布していたと考えられる。また遺跡周辺は発掘調査時にアカマツ林や、コナラ林で覆われており、現在と試料No.1層準(5層)堆積時は、ほぼ同様な植生であったと考えられる。

また概査の結果、試料No.2、3(6層)にはイネ科植物起源と考えられるプラント・オバールが多量に含まれていた(図版・残渣写真参照)。さらにこれらの試料には多量の炭も含まれていた(図版・状況写真参照)。含有された炭に木材の組織が含まれないことから、多量の炭はイネ科の植物に由来したものである可能性が高い。したがって、6層堆積時に調査地周辺では、イネ科植物が茂っていたと考えられる。

まとめ

今回の分析結果から、以下のことを考察した。

- (1) 花粉化石の検出量が少なかった原因について以下の要因が指摘できた。
 - ① 化学作用による花粉化石の劣化が主要原因であると考えられる。
 - ② 5層(試料No.1)、6層(試料No.2、3)については紫外線による花粉の劣化も原因の1つであったと考えられる。
- (2) 5層(試料No.1層準)の堆積時期について、およそ西暦1500年頃以降と推定することができるが、出土遺物の年代観と矛盾した。現状では、年代推定を行うための確かな証拠が不足している。今後周辺地域の植生変遷や、遺跡周辺に分布した二次林の構成種などが明らかになれば花粉分帯からの対比がより正確に行える。
- (3) 花粉分析結果から、5層(試料No.1)堆積時期には、二次林が広がっていたと推定できた。
- (4) 微化石概査の結果から、6層(試料No.2、3)には、多量のイネ科起源のプラント・オバールが含まれていた。また、花粉分析用プレパラートには炭が多量に含まれていたことなどから、6層堆積時に周辺にイネ科植物が繁茂していた可能性が指摘できた。

引用文献

- 大西郁夫(1993) 中海・穴道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化. 地質学論集, 39, 33-39.
渡辺正巳(1995) 花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社.



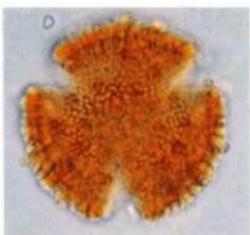
ツガ属：約760倍



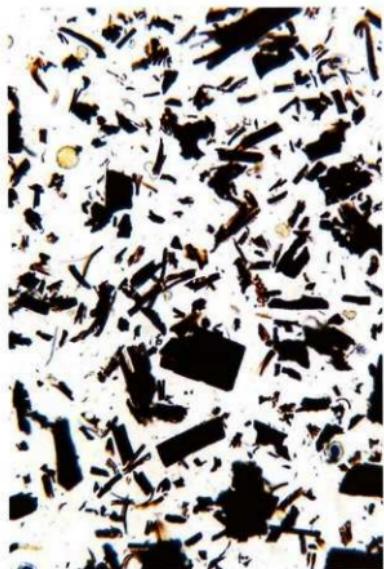
スギ属：約1100倍



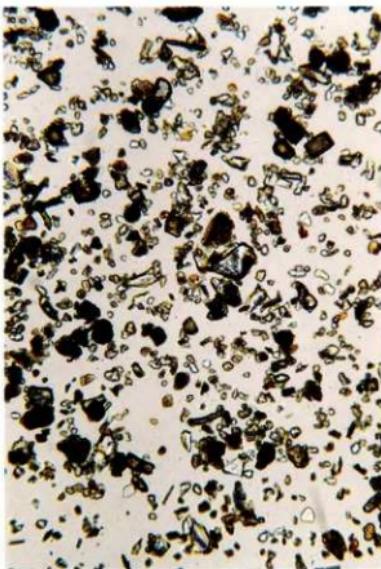
ツツジ科：約760倍



キク亜科：約760倍



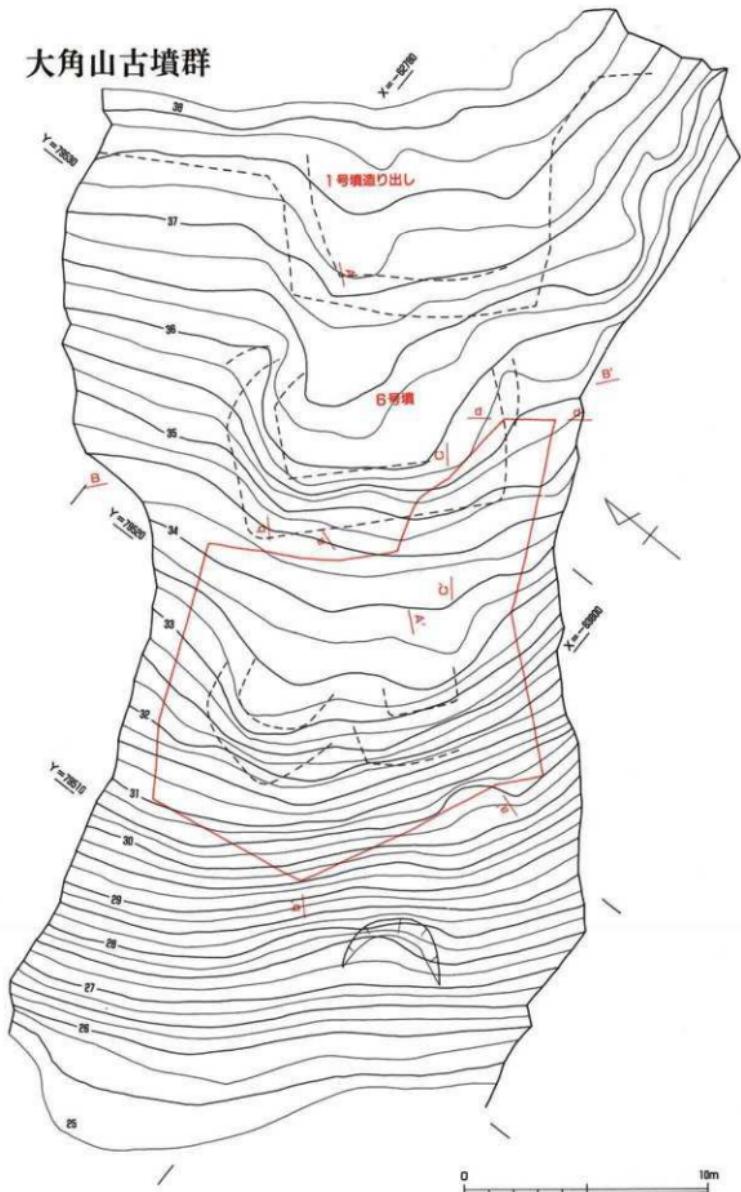
状況写真(試料No.2)：約95倍



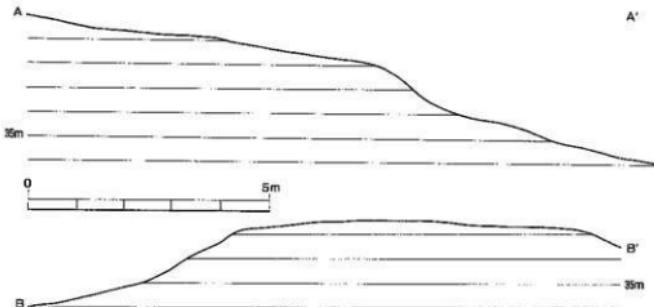
残渣写真(試料No.3)：約95倍



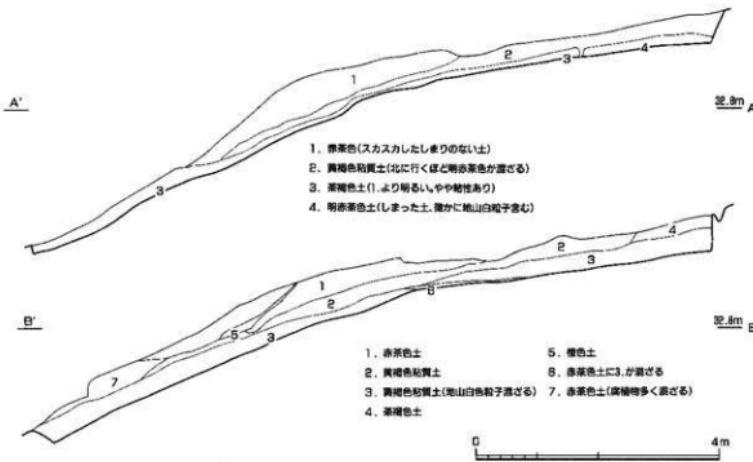
IV 大角山古墳群



第37図 調査前地形測量図 ($S = 1 : 200$)



第38図 6号墳 墳丘断面図 ($S=1:100$)



第39図 調査区内土層堆積図 ($S=1:80$)

(注1)
大角山古墳群は松江市乃木福富町から八束郡玉湯町に所在する。遺跡は宍道湖の東南岸にあたり北に向て延びる低丘陵上に位置する。

古墳群は丘陵頂部に位置する、全長61.4m、高さ4.5mの前方後円墳である1号墳と6基の小規模な方ないし円墳から構成される。今回、調査対象となったのは1号墳の造り出しに近接して位置する6号墳とその南西の7号墳である。

7号墳 調査前の表面観察では、二つのこぶ状の高まりを呈しており、2基の小規模墳が近接して存在するのか、或いは、主体部の盗掘などによる後世の改変の結果なのか、と想定された。このため二つの高まりを通るセクションベルトとそれに直交するセクションベルトを設定し調査を進めた。表上:

下には赤茶色土、黄褐色粘質土、黄褐色粘質土（地山粒子混ざる）があり地山に至る。赤茶色土は人為的な盛り土と判断されるがBラインでは間に橙色土を挟んで、谷側に向けて堆積しており、斜面に向けて押し流したかのように見られた。こうした堆積のあり方から古墳の盛り土とは考えにくく、上体部も確認出来ないことから、古墳ではないものと判断した。

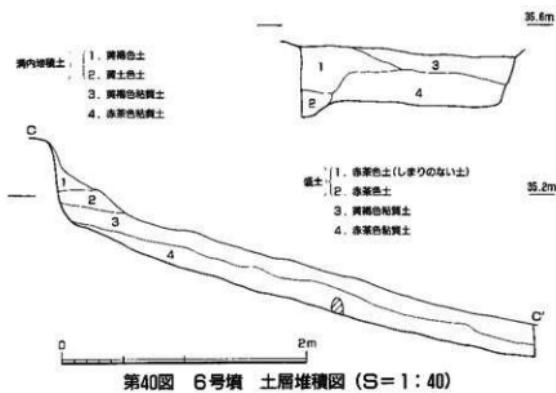
6号墳 地形測量の結果、南北11.3、東西7.3m、高さの1.0mの方墳と考えられた。墳丘西辺の中央部は凹んでいるが盜掘等の改変を受けたものと思われる。今回調査対象となったのは墳丘南西隅のみである。盛り土は2層で、赤茶色土と疊混じりの赤茶色土となる。墳丘南側では溝を検出した。規模は溝上面幅0.2m、深さ0.18m。溝内には黄褐色土とおうど色土が堆積していた。墳丘南から器種不明の上師器が1片出土している。

小結 調査区内に所在する7号墳は古墳ではないことが判明した。また、今回実施した測量調査により1号墳は造り出しを有する前方後円墳であることが分かった。前方部との接続部が明瞭でなく、自然地形に沿って造られているため先端も流出している。現状で長さは北側で5m、南側では7m、幅^(注2)は先端で10mである。今後墳丘全体を含めた精緻な測量図の作成が必要であろう。

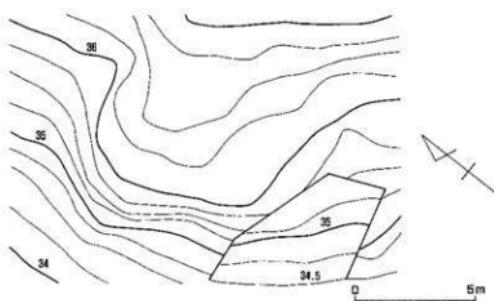
(注1) 大角山古墳群は島根県消防学校建設に伴う予定地内の分布調査で発見、保存されたものである。

島根県教育委員会『島根県消防学校建設に伴う大角山遺跡発掘調査報告書』 1988

(注2) 注1の報告書には測量図が掲載されている。その調査の際に、任意で設定された測量杭は、今回の調査時に失われていたことから、図面の合成は出来なかった。

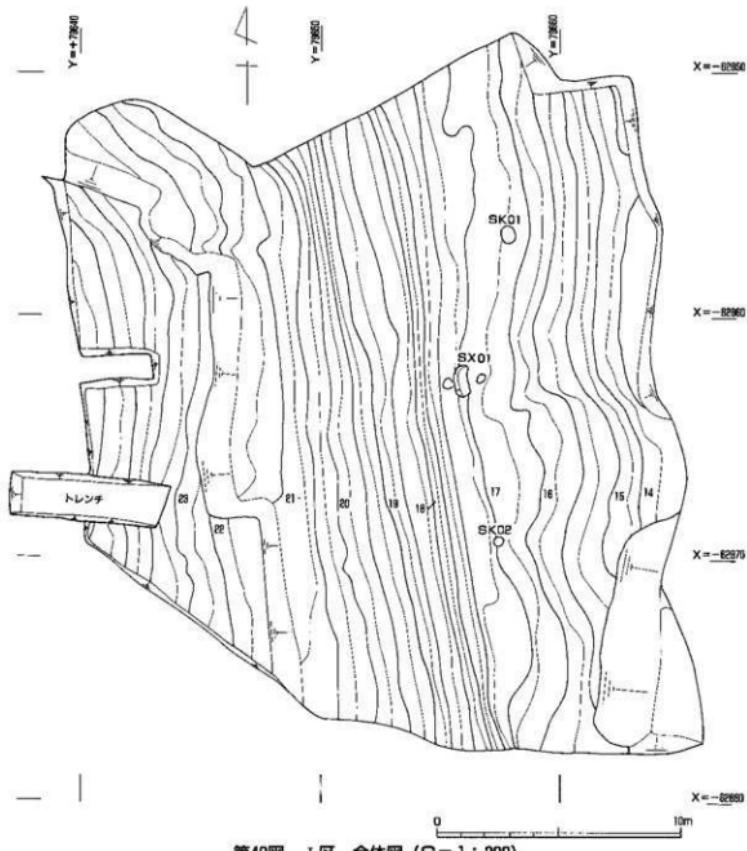


第40図 6号墳 土層堆積図 ($S=1:40$)

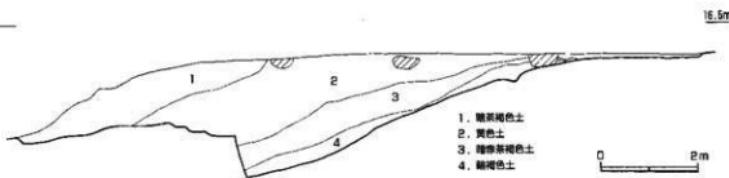


第41図 6号墳 地形測量図(盛土除去後) ($S=1:200$)

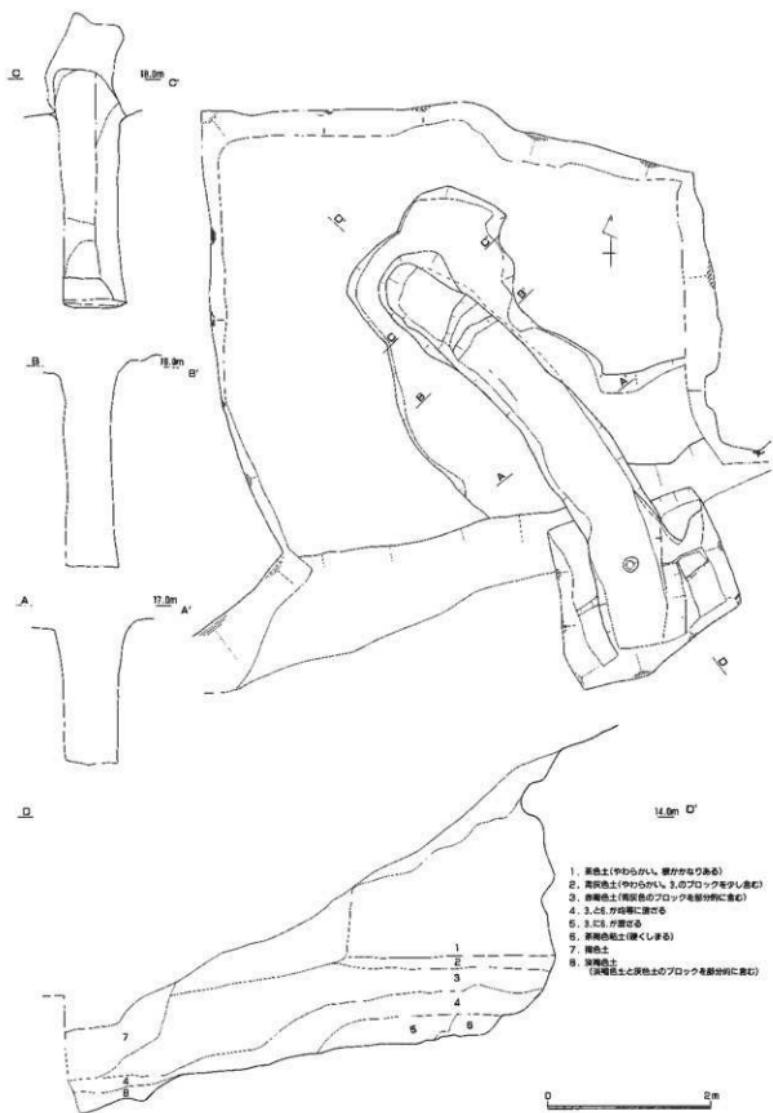
V すべりざこ古墳群



第42図 I区 全体図 (S = 1 : 200)



第43図 土層堆積図 (S = 1 : 100)



第44図 粘土貯蔵穴実測図 ($S = 1:60$)

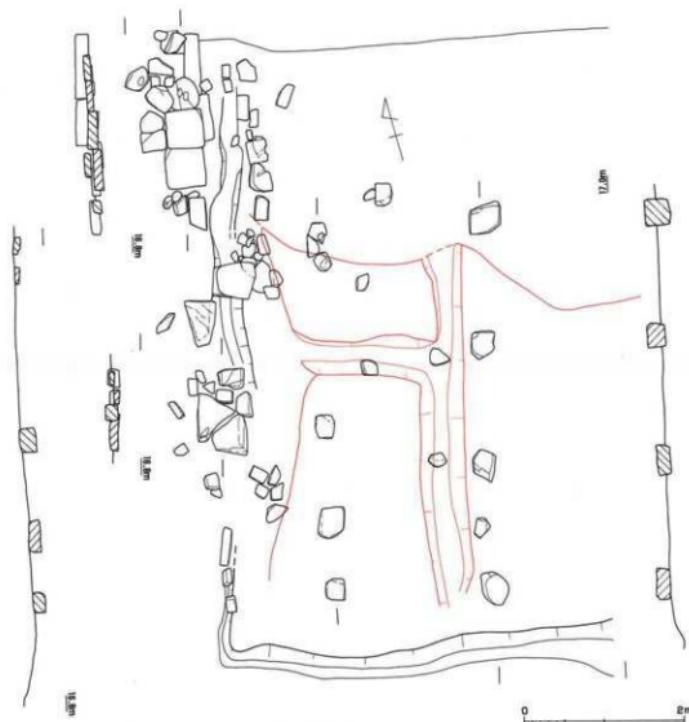
調査はトレント調査の結果を受けて、調査区をI～IV区に分割して本調査を実施した。

I区は、西から東に延びる丘陵斜面を削平して耕作地としており、丘陵裾部は改変され県道浜乃木湯町線の法面となっている。ここでは土坑2基と性格不明の遺構を検出した。II区では、道路遺構の存在が予想されたが、県道造成の際に大規模な改変を受けているようであり、近代以降と思われる礎石建物跡以外には遺構は確認できなかった。III区では土坑1基を、IV区では粘土貯蔵穴と思われる横穴状の遺構を検出した。

粘土貯蔵穴

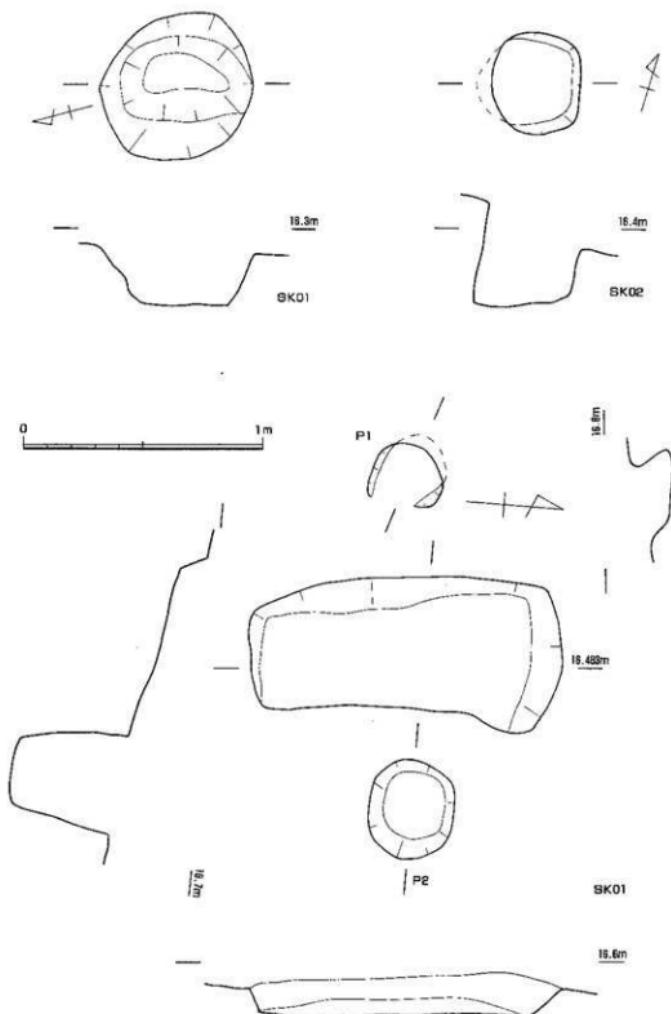
粘土貯蔵穴は東西に延びる丘陵の南斜面に直交するように掘り込まれており、狭長な横穴状の形態を呈する。規模は長さ5.8m、幅は0.6～0.7m、深さは入口側で1.2m、奥側で3.0mと、かうじて人一人が通れる程度である。床面はほぼ平坦だが、入口側から4.5m奥に入ったところで一段高くなり、その上に茶褐色の粘土が置かれていた。粘土は段の上に厚さ0.3mとほぼ均一な厚さで置かれていた。

この粘土を現在も操業している布志名焼の窯元の一つである雲善窯の土屋善四郎氏に実見して頂いたところ、布志名焼の生地として使用できるものとのことであった。遺構内は、當時水が滲みだす高



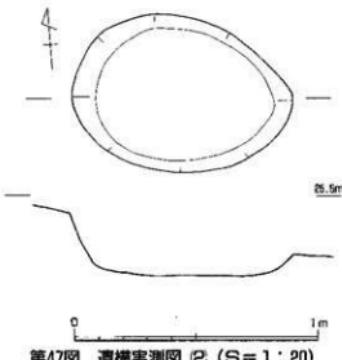
第45図 硙石建物跡実測図 (S=1:60)

湿な環境下にあり、粘土の保管に適していることが考えられる。付近の窯への作業従事者が、日常雑器生産に用いる粘土を保管するために築いた粘土貯蔵穴の可能性も考えられる。



第46図 遺構実測図(1) ($S = 1:20$)

礎石建物跡



第47図 遺構実測図 ② (S = 1: 20)

建物跡は、県道浜川木湯町線に面した平坦面で検出した。建物跡は礎石建物で、丘陵後背部には幅15~20cmの浅い溝が二字形に刨っている。建物の規模は、礎石の真心で南北4.7m、東西2.0mを測る。建物の西側には、やや大きめの石を並べて、南北1.0m、東西0.6mの石組が築かれている。その北側2.2mのところには0.5m角の板石を並べている。これは建物跡への入口につながる階段に相当するものと思われる。建物下には平面T字形に暗渠が築かれていた。暗渠の規模は幅0.25m、深さ0.1m前後である。建物跡の時期は出土品からみて近代以降と思われる。

そのほかの遺構

I区で土坑2基と性格不明遺構1、III区で上坑1基を検出した。いずれも遺物を伴わない時期不明の遺構である。

SK01は平面円形を呈し、径0.64m、深さ0.2mを測る。SK02は、上面で0.42×0.38mとほぼ円形を呈し、深さは0.21~0.46mを測る。西側はオーヴァーハングして掘り込まれている。SX01としたものは加工段とピット2基より構成される。加工段は、南北1.26m、東西0.40~0.60m、深さ0.10~0.18mを測る。加T段を挟んで、東西にピットが掘り込まれている。東側のピットが垂直に造られているのに対し、西側のピットはオーヴァーハングしており深さも浅いものであることから、有機的な関係はないものと思われる。東側のピットは径0.40×0.35m、深さ0.40~0.46m。西側のピットは上面の径0.30×0.22m、深さ0.17mである。

III区で検出した土坑は、底面から木炭粉や焼土塊が出土している。平面は楕円形を呈し0.90×0.65m、深さは0.23~0.08mを測る。

小結 調査の結果、当初予想されていた横穴墓などの遺構は確認できなかった。しかし、古墳時代後期と思われる須恵器瓶片もわずかながら出土しており、当該期の遺構が存在したものと考えられるが、後世の大規模な改変を受け消滅した可能性が高い。

近代以降と思われる粘土貯蔵穴は、隣接する玉湯町若山地区で江戸時代中期以降連續と造られている布志名焼（出雲焼、若山焼）に関係するものと考えられる。ただし現段階では、こうした遺構については調査例もなく、検出された粘土についての自然科学分析も行えていないなど、充分な検討が加えられていない。今後の類例の増加を待って改めて検討を加えたい。

図版



1. 空から見た
松本古墳群
すべりざこ古墳群
大角山古墳群



2. 松本古墳群I区
(西から)

図版2 (松本古墳群I区)



1. I区 道路遺構（西から）



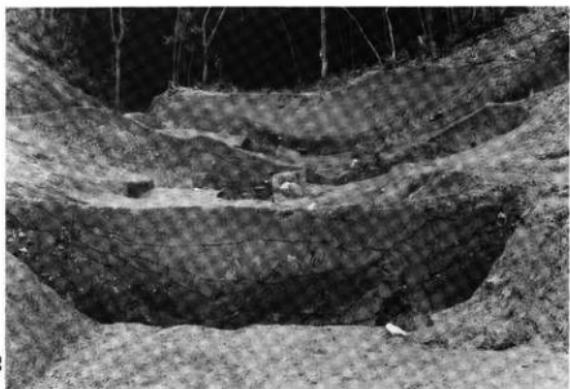
2. I区 道路遺構（東から）



1. 道路邊構土層堆積狀況
(A-A')

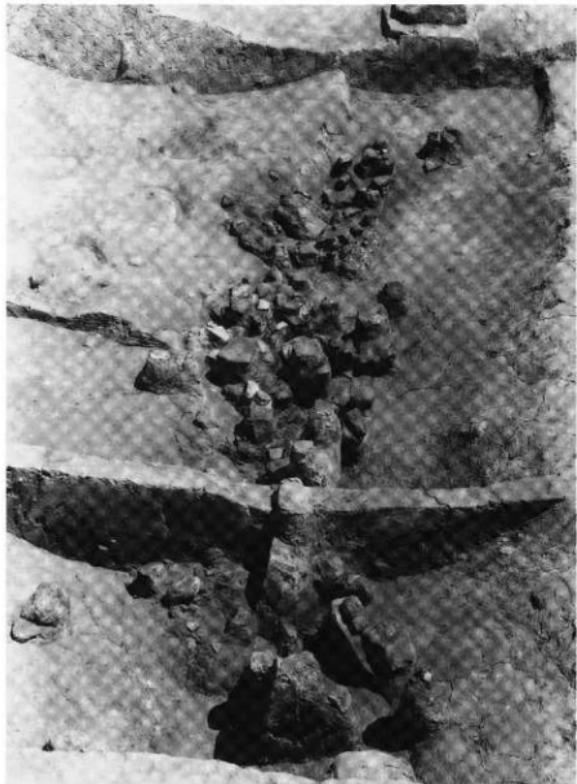


2. 道路邊構土層堆積狀況
(B-B')



3. 道路邊構土層堆積狀況
(C-C')

図版4 (松本古墳群I区)



1. 黒色土層遺物出土状況
(西から)



2. 同 上 (拡大)



1. 道路造構法面



2. 道路造構 (東から)



3. 現地説明会
(1995年9月23日)

図版6 (松本古墳群I区)



1. 溝状遺構（西から）



2. 橫穴状遺構（西から）

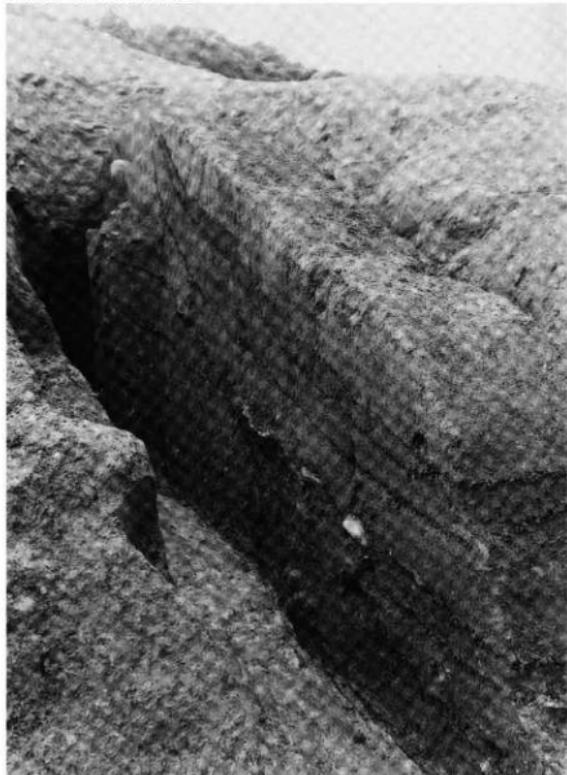


1. 3号横穴墓（南から）



2. 前庭部調査風景

図版八（松本3号横穴墓）



1. 前庭部土層堆積状況
(縦断)



2. 前庭部土層堆積状況
(横断)

圖版9（松本3号横穴墓）



1. 前庭部土器出土状況

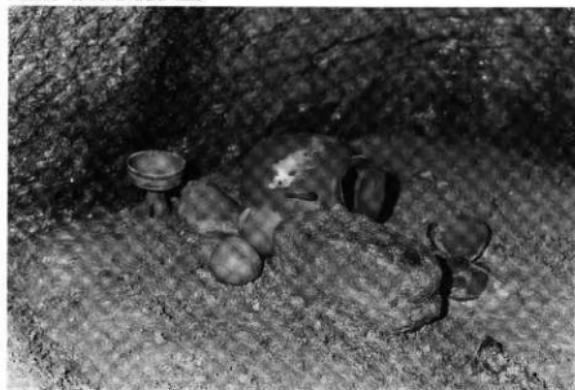


2. 閉塞石検出状況



3. 玄室内完掘状況

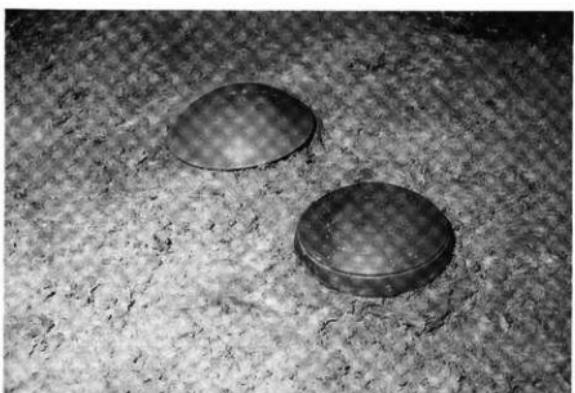
図版10（松本3号横穴墓）



1. 玄室内遺物出土状況



2. 玄室内遺物出土状況
(大刀)



3. 玄室内遺物出土状況
(第17図1・4)



1. 玄室内遺物出土状況

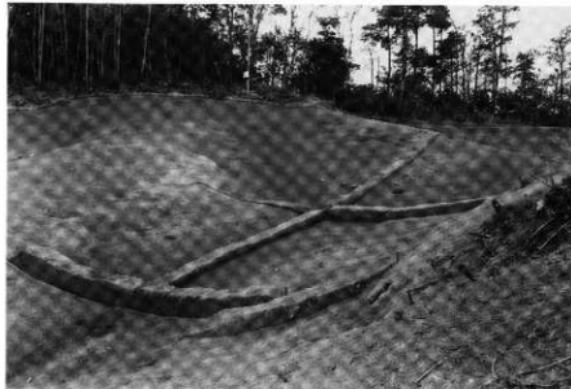


2. 玄室側壁加工痕

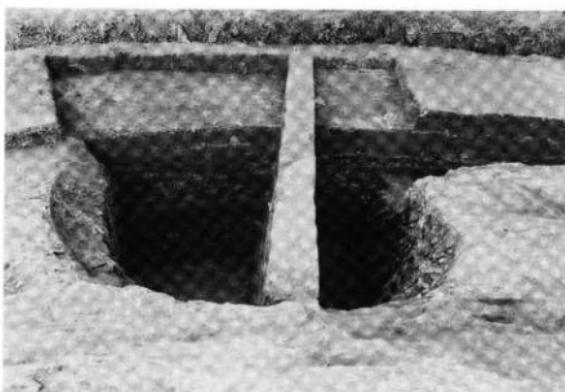


3. 同 上 (拡大)

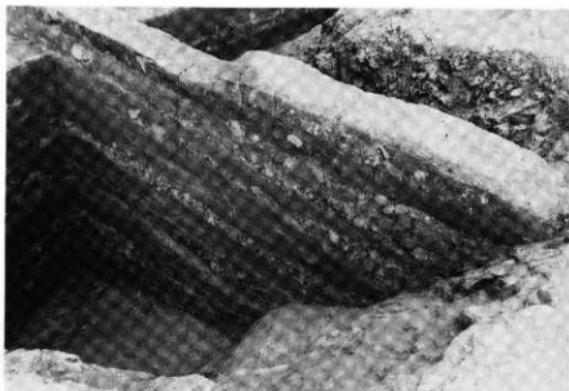
図版12 (松本古墳群III、IV区)



1. III区土層堆積状況
(北西から)



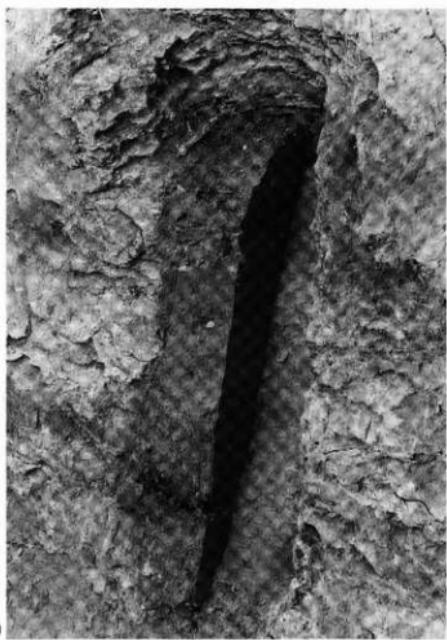
2. 墓跡 (西から)



3. 墓跡土層堆積状況

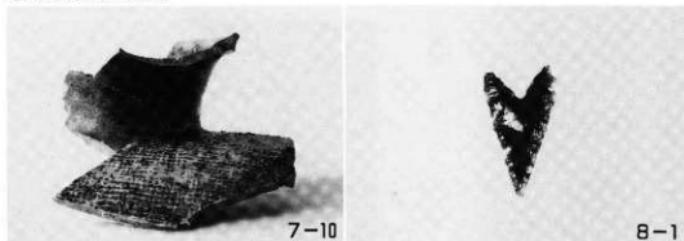


1. 横穴状遺構（東から）



2. 同 上 (拡大)

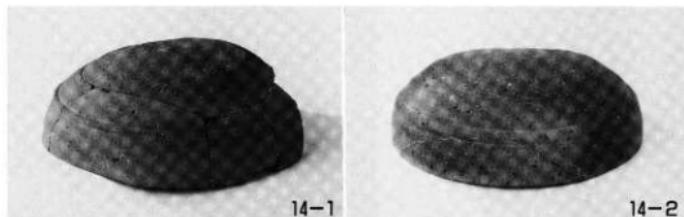
図版14 (松本古墳群)



7-10

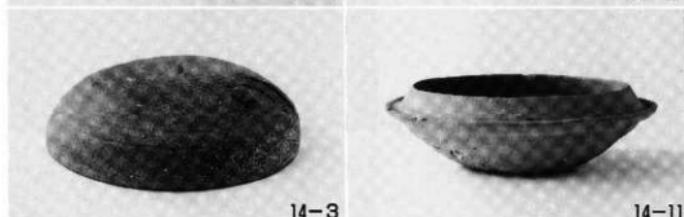
8-1

I区 出土遺物



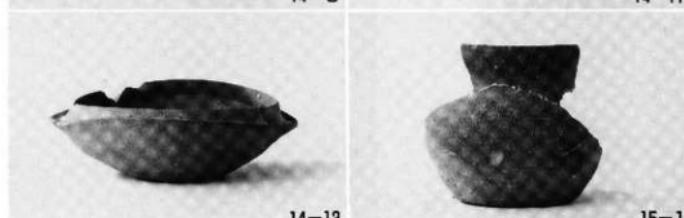
14-1

14-2



14-3

14-11



14-12

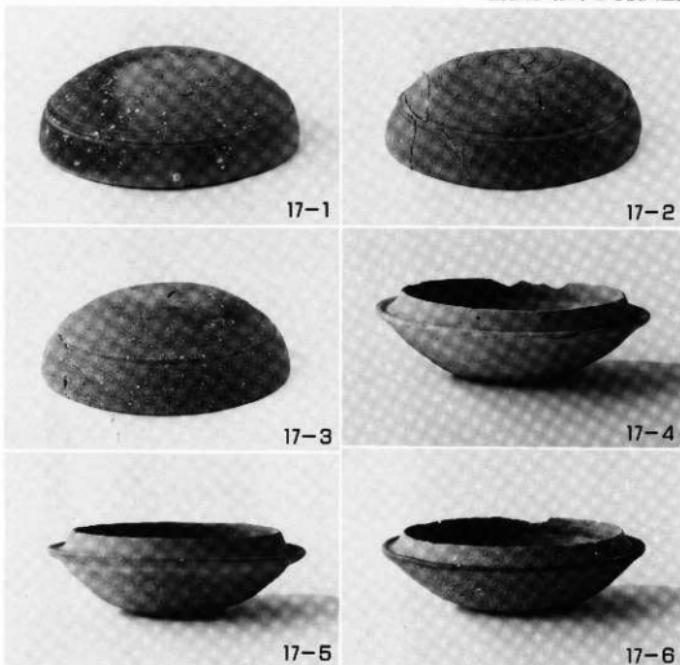
15-1



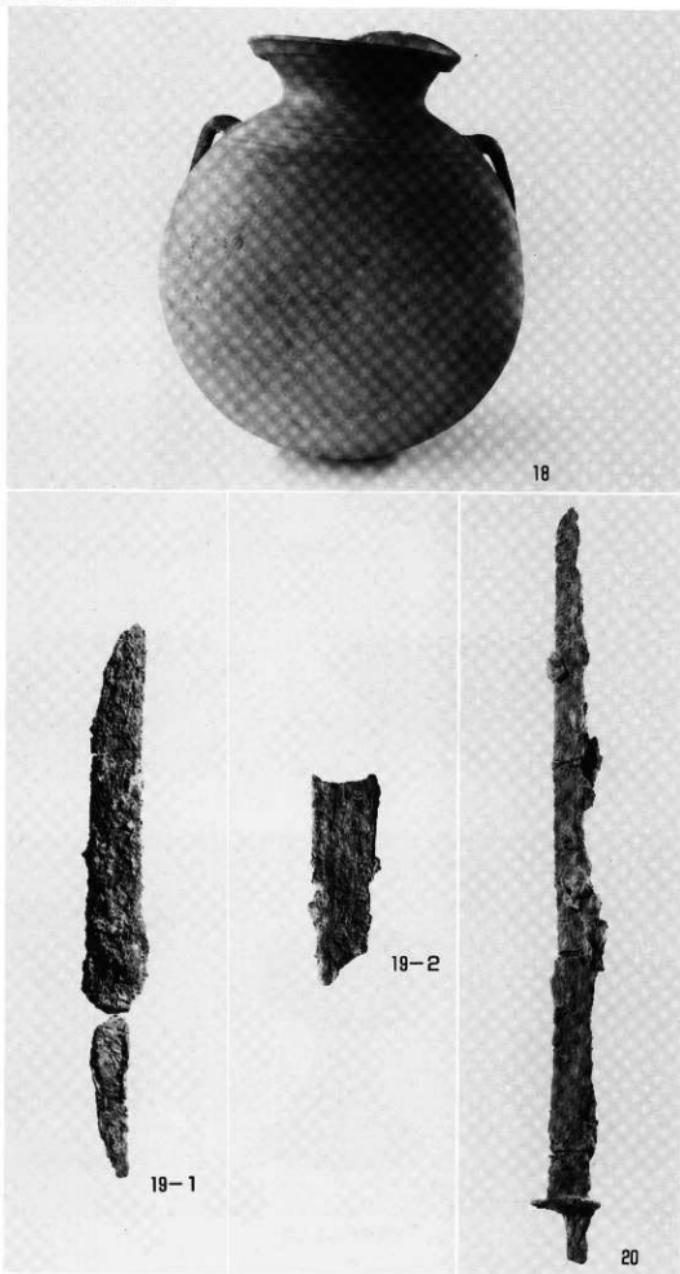
15-2

3号横穴墓出土土器

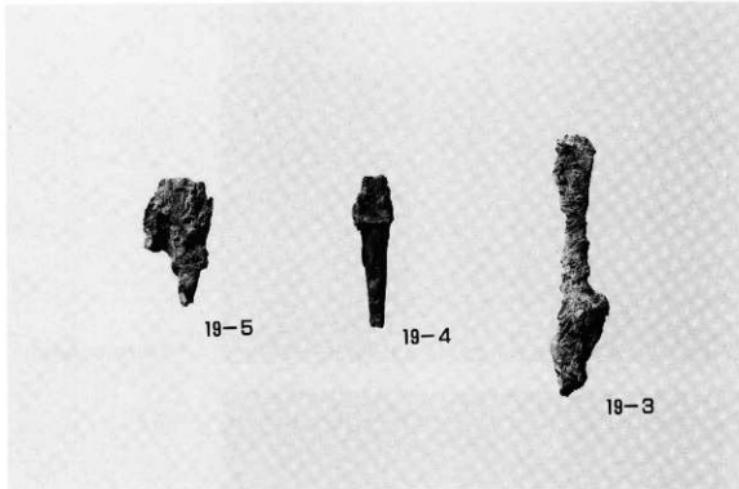
図版15 (松本3号横穴墓)



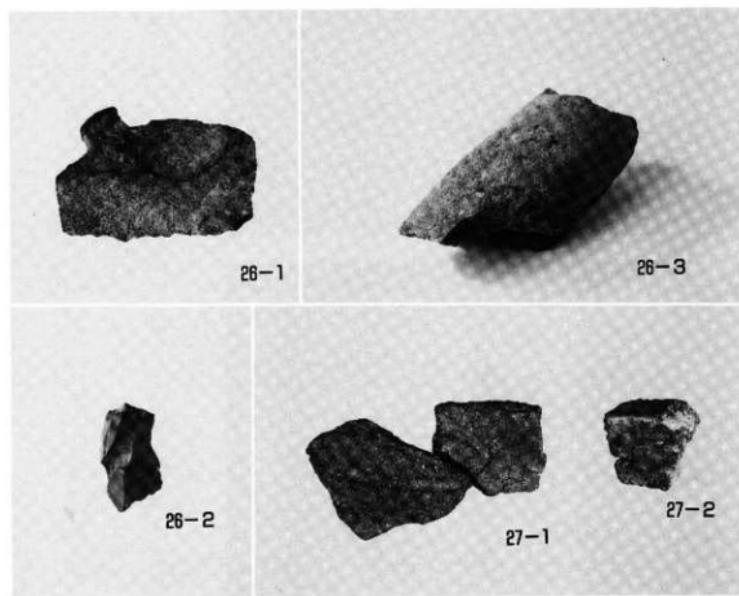
3号横穴出土土器



3号横穴墓出土土器及び鉄器



3号横穴墓玄室内 出土铁器



III区 出土遗物

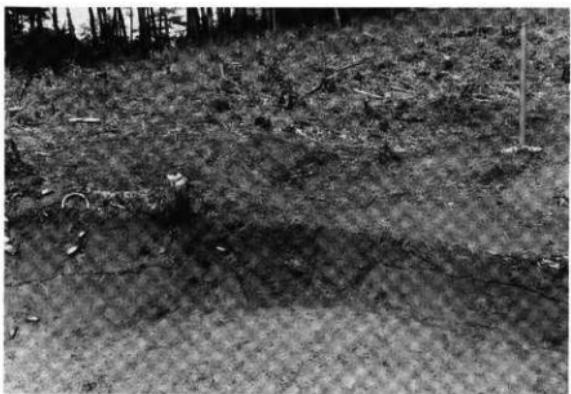
図版18 (大角山古墳群)



1. 1号墳から見た6号墳



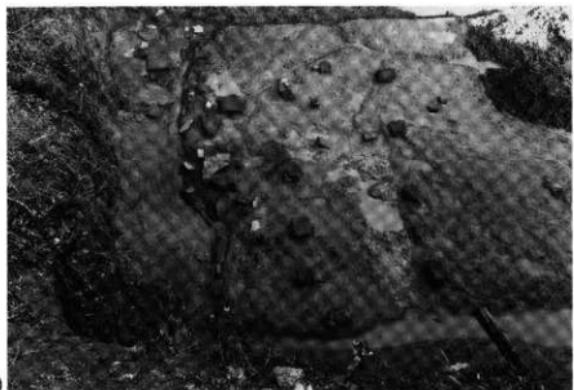
2. 調査区土層堆積状況



3. 6号墳土層堆積状況



1. 粘土貯藏穴（南から）



2. 碓石建物跡（南から）



3. 碓石建物跡入口部分

松本古墳群
大角山古墳群
すべりざこ古墳群

一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

平成9年3月印刷
平成9年3月発行

発行 建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

印刷 渡 部 印 刷